



お伽歴史講談序

初代桃川の翁が。恐れ多きも御前の講演。おもしろき教  
へのお伽噺。人情の道や。武士道の事の數々。嬉しふも  
残されたを。取合はせて和子様方のおれの上へ参らせば  
やと。國華堂の主人が心入れも頼母し。少年方の御學び  
の間の慰み。これ繕いて父様母様にお聞かせなさらば。  
まアどんな？

ぎやうこふ





楠の泣男

伊達政宗公座右銘

仁に過れば弱くなる。  
 義に過れば固くなる。  
 禮に過れば諂と成る。  
 聖に過れば虚をつく。  
 信に過れば損をする。





宿直袋





馬 揃 ひ





り潜水の篠長



目次

◎ 出しゅつ

世せの 盃さかずき  
馬場三郎兵衛、南部公の對手に、昔を語り  
て、出世に及びし、古戰場……

◎ 楠くすのき

の 泣なき 男をとこ

杉本佐兵衛、辨舌を以て、楠家に使はれ、  
三寸の舌頭を以て、英雄を泣せ、敵を欺き



◎宿との

直か袋ぶくろ

勝利を得たる快談……………二七

松平伊豆守幼年なき時雀を捕て、家根より  
落ち將軍の怒りに觸れ宿直袋へ入れられし  
お伽噺……………四六

◎馬うま

揃そろひ

山内一豊賢妻の志しに依て名馬を求め夫れ  
が爲に馬揃ひに一番の効を現し、家を興す……………七四

◎孝かう子し佐さの山やま

奥州の相撲取り佐の山が孝子の徳に依て大  
力無双の横綱谷風梶の助に勝を取り貧乏神  
が福の神となる孝子の譽れ……………九三

◎長なが篠しのの水みづ潜くぐり

鳥居強右衛門、長篠の合戦に味方の籠城覺  
束なき折柄川中を潜て濱松城へ援兵を求め  
其身は歸途敵に捕れ惨死するも、爲に味方



● ね

の大勝利を得た勇士龜鑑……………一三

ぎ ま

雲州の隠居、不迷公雪見の折柄居酒屋に、  
ねぎま、を食されし昔の御大名を穿ちたる  
滑稽……………一五二

● 言葉の助太刀

尾張の浪士東海道岩淵に父の敵を討んとし  
て、巳に返り討にならんとせる折、大鹽平

● 日光彈拔の輿物

八郎只一言葉を添し爲め首尾よく仇を報じ  
むたる義勇の譽……………一七六

車丹波守徳川二代將軍を狙ひ箱根山中に砲  
發し後ち長崎に於て捕はれ遂に將軍の徳に  
服す、第二の景清とも云ふべき物語り……………一九七

● 碓氷の紅葉

信州松本藩主の一言によつて、上田藩士二



お伽歴史講談

初代 桃川如燕講演

出世の盃

茲に越後國村上の内藤様と申すは是を隅の内藤といひ御先祖は内藤左衛門信成と申して家康公の御舍弟でムいます、一言坂の戦かひに武田の先手山形三郎兵衛の兵に取り巻かれ既に危うき處へ本多平八郎忠勝が乗り付けて山形の家來を左右に切り拂い左衛門信成を助けて徳川の陣へ歸られました時、山形の兵は跡を追はんと致します

天

狗問答

名を出世させたる目出度美譚……………二三〇

水戸西山公日光山に登り給ひ、異様の山伏

(俗に天狗)と問答に及び遂に其山伏を退けると

云ふ奇談……………二四九

目 次 終



ると三郎兵衛是を止めア、徳川の士は軍が功者であると賞めました  
此時徳川に過たる物が二ツありからの頭に本多平八といふ落首がム  
いきました、其の信成の子孫にて内藤紀頭と申す方の奥方は藤堂大學  
高久公の妹子にて御夫婦の中に若様御誕生に就いて御恐悦の御宴を  
開かれ御親類方を七十三頭お招ぎになりました處が何と申しても内  
藤家の先祖は徳川家康公の御舎弟でございますから酒井、榊原、伊  
井、本多、鳥居、大久保、大村、安藤、水野、内藤御一家は申すに  
及ばず御親類方が澤山御出になり正午過より御酒宴が初まりました  
暮方に残らずお歸りになり跡に藤堂様お一方お残り遊ばし是はお妹

子の若様御誕生なされし事故一層の御恐悦にて殊の外御満足でムい  
まして宜い心持に御酩酊頓て藤堂様は  
大「紀伊家今日は充分に頂戴を致してどうも宜い心持でムるどうか  
冷水を一杯所望致したうござる。」  
と是を聞き竹尾金太夫と云ふ御家來が御前を立たうとする時に  
紀「これ〜金太夫。」  
と紀の頭様のお召しでムいますから金太夫ハツと主人の傍へ行ます  
ると耳の處へ口を寄せて  
紀「金太夫お兄い様は御酒量が烈しく被入しやるからまだ〜中々



御酩酊の御様子でない冷水と仰しやつたが銀の天目形の水呑に冷酒を八分目程に盛て差上る。」

金夫は恐れながら貴公様の思召違ひ、御酒と云ふものは一時は高味うございますが扱喉の乾きを生じますると其の味が變ります物でそこで水を戴だきますと又高味くなります「酔醒の水の旨さを下口知らず」と云ふ事がムいします上は御酒を少しも召し上りませんに由て左様仰せられまするが藤堂様は冷水と仰せられまするから矢張水を差上りましたが然る可きでムいします。」

起夫は其方の心得違ひ天目形の水呑に冷酒を差上ると申すに。」

と少しく御不興氣の御様子故金太夫は覺束なくは思いましたか主命の事だに由て據ころなく

金委細承知仕つりました。」

と云つて銀の天目形の水呑に御酒を八分目注で恐るゝ藤堂の御前に差上りました藤堂様は

大「ア、宜い心持に酩酊をした。」

と右の水呑を取て冷水だと思召たからガブリとお飲みになると何んなに酔て居ても水と酒と分らん事はないガツと噎せました常に御酒の上が悪うございますからムラゝと致し



大ア、紀伊家には水と申したに酒を御馳走イヤサ有り難い、是れ  
大學高久は酩酊をすると水と酒との境が分らんと思召か其の位の事  
が分らんで私の黨の旗頭が勤まると思ふか……ウム戴かふく面  
白い併し一人で飲んで旨くない御享主紀の頭殿はカラ下口だ誰か  
是に來て對手を致せ。」

と今迄の機嫌の宜かつた藤堂様が目色を變へてお怒りの御様子です  
から紀の頭様も是は悪い事をしたと思ひ悉くの御心配奥様も兄上様  
が御機嫌よく召し飲つて入しつたに遽かに御様子が變りましたが性  
來御酒の上のよくない事は御存じ故腫物に障る様にして何とお言葉

も出さず只御夫婦顔と顔を見合せてどうしたら宜らうと御心配の様  
子金太夫は再び殿様の御耳の處へ口を寄せ

金「夫だから私しが申上たのでムいます、併し斯うなつた上からは  
貴公がお詫を成さると猶お怒りになります故懨いお詫を成さん方  
が宜しうムいます。」

紀「ウム左様かなどうしたら宜らう。」

金「藤堂様が頻りに對手を出せくと仰しやいますから幸い茲に一  
人の大酒吞がムいます是を御前のお對手に出して酒戦と云つて戦か  
はせましたならば又々氣を散じて旨く飲めまするに依つて何も貴公



様に對し御意恨もない事でございますから又宜い心持に召し上る中  
お眠氣が參りゴロリと横にお成り遊ばして其の儘お眠りになりお目  
覺になる時分には既う御様子がガラリツと變ります御酒家と云ふ者  
は手前も好きでムいますから其調子は能く心得て居ります上は少し  
も召し上らんによつて御酒の様子を御存じないと尤も萬事金太夫に  
お任せ下さい。」

紀「宜し〜テハ兄上のお怒りの覺めるやうに何分頼む。」

金「畏まりました。」

と御前を下りましたが金太夫の目に付て居りますものは近頃一番

部屋へお抱へに成りました三郎兵衛と申す足輕がムいます年齢は既  
四十五六どうも大酒飲で至つて頑丈の男眉間に月形の疵があります  
が是まで別に酒の爲に失策た事もなく一生懸命に御奉公を致して御  
奉公の間には内職をして前町の酒屋へ往て冷酒をグーツと飲んで鹽  
を嘗める是が如何にも旨さうで金太夫も酒好でムいますから俺も一  
番冷酒をグットやつて鹽を嘗めて見たいと思つて居りました三郎兵  
衛は御奉公の間に眞黒になつて内職をして是を鳥目に換へて酒を飲  
むのを樂みに致し一生懸命に稼いで居ります處へ金太夫參りまして

金「三郎兵衛。」



三「イエ是はく御機嫌宜しう。」

金「其方が毎日前町の酒屋へ往て升の隅から酒を旨さうに飲んで一寸鹽を嘗める處の呼吸が宜つてならんがなア就ては外ではないが藤堂様の御前の對手をする者が無いに由て貴様なれば宜らうと云ふ考へで是まで參つたが貴様何の位に飲んだら自分でも酔うたと思ふイヤサ何の位飲んだら宜い心持になるか。」

三「ごうも私しは因果でムいます。」

金「酒を飲んで因果と云ふ者があるか。」

三「所が因果で毎日眞黒になつて稼いで御給金を戴き衣物一枚着る

ではなし皆んな酒を飲んで仕舞何の樂みもムいませんが私しを指して底抜上口と申すのでムいませう、何位飲んでも宜いといふ所へは至りません私しは李伯が日本へ來たら一問答仕様と云ふ位で。」

金「さうか夫はマア丁度宜い何でも貴様なれば今日のお役は勤まるだらうと金太夫考へたから早速出て來たが藤堂様の對手をして呉れ

三「夫は旦那不可ません。」

金「何故。」

三「何故だつて私しは下郎、口の聞きやうも體のこなしやうも知りません然んな究屈な所へ出てお對手をする譯には往ません飲みたい



のは山々でムいますがどうぞ是は御免を蒙りたうございます。」

金所ろが外に對手に出る者が無いのだ、どうか貴様大儀でもあらうが出て貰いたい別に面倒な事はない成る丈け丁寧にして言葉に御の字と様を付てお辭儀さへ仕て居ば差支へはない

三「夫なら宜うございます御奉公と云ば公に奉ると云つて命さへ上ると云ふ程の事奉公なれば厭いませぬ、其の代り不禮のあつた其の時に横合から口を出しては不可ませぬ。」

金「だが成丈氣を付けて呉れ。」

三「宜しうムいます。」

と茲で金太夫の衣物を借りてスツかり着替へ金太夫は三郎兵衛と同道して藤堂様の御前へ罷り出でました

大「金太夫、其者が對手を致すのか。」

金「御意にムります。」

大「ウム姓名は何と申す者だ。」

金「へエ馬場三郎兵衛と申します。」

大「馬場三郎兵衛成程名は體を顯すといつて餘程バツな顔色だな。」  
と藤堂様お口が悪い

大「三郎兵衛とやら最と進め。」



三郎兵衛は只だお辭儀をしろくと吩咐つて居るからビヨコ〜  
御辭儀ばかりして居ると

大「コレ〜三郎兵衛貴様のやうに頭を下げて居ては第一目がまは  
つて酒の對手が出来んア一察する處金太夫に何か吩咐つて來たな、  
コレ三郎兵衛酒と云ものは禮に初まつて亂に畢る、其の亂を整ふも  
のが飯だ酒を飲んでる中は無禮があつても咎める者ではない、又た  
無禮を咎める位なら酒を飲んが宜い、飲せんが増し、決して心配す  
るには及ばんから疾く進め。」

三「左様ならば頂戴致します。」

大「大きな物が宜い大きな物が宜い。」

三「へい大きな物に限ります私しは小さな物は大嫌いでございまし  
て小さな猪口でチビ〜飲む位なら飲まない方が宜うムいます。」

金「ウム是でやれ是でやれ。」

三「イヤ新造のお酌で御苦勞様。」

金「是れ〜何だ御前に於て新造なと〜。」

大「金太夫控へ居れ老母を捕へて新造と云つたら怒つても宜いが新  
造だから新造と云つたんだ金太夫一々咎めては不可ん咎めるは愉快  
の妨げぢや控へ居れ〜。」



三「大將咎められては酒が旨くないや。」

金「コレ〜。」

大「金太夫又出て来た大將と云ふが悪いか第一將軍を指して征夷大將軍と云ふ一方の旗頭になれば大將ぢや斯く申す大學と雖も私の黨の大將咎める處はない金太夫物を辨まへんのぢや是れ飲め〜。」  
外の者はツト〜と盃を上へ上るが三郎兵衛はモツト〜と下へ下る並々と注がせて置いてグツツト一口に飲みました

三「ア、どうも旨へなア。」

と云いながら一寸指を鼻の先へやつた是は藤堂様には分りませんが

酒屋へ往て升の隅からグツト呑んで鹽を嘗めるのが癖になつて居ります、ツイ鼻の先へ一寸手をやる此の男妙な癖があると思召して

大「今一杯飲め。」

三「有難う存じます錢の出ぬへ酒は旨へ。」

金「是れ〜御前に於て怪しからん事を云ふな。」

大「又た出居つたな、只飲む酒は旨いといふは全たくだ物は正直がよいぞドン〜呑め。」

三「有り難う存じます。」

大「是れ三郎兵衛貴様の眉間の疵は勇士戦場の向う疵年輩の様子は



大坂兩度の戦かいに受けたのか夫とも若年にして關ヶ原の大戦に受けたる疵なるか酒の肴に眉間の疵の物語りそれにて致せ大學是れにて承たまはらん。」

と仰しやいました三郎兵衛

三「へー是はね殿様子供の時に竹馬から落ちて切り石に打付て受けました眉間の疵お尋ねにあづかつて面目次第もムいませぬ。」

大「黙れ三郎兵衛槍疵なるか太刀疵なるか矢疵なるか弾疵なるかを知らずして其の方に尋ぬるか慥かに夫は太刀疵なりと見たは僻目か憚かる處ろなきに由て大學此の刀に掛けて聞かん。」

と眼色を變へて問ひ詰られました

金「サア遂々野郎捕まつた是が忌だから酒肴の對手は出来ない。」

と金太夫心配をして居ると此の時三郎兵衛は

三「刀に掛けてと御意召さるゝか然らば言上仕つる。」

と膝立て直して今迄とはガラリ變つた其の有様は四邊を拂つて見へたりける

三「嗚呼がましくは候らへ共遠く先祖を尋ねれば武田大膳太夫晴信入道信玄に仕へたる牧の島の城主馬場美濃守信房が子孫なり、祖先美濃守は長篠にて討死なし其子天目山に斃れ遂に其の子孫故主を立



ち退き美濃國郡上へ罷り越し大坂に於て召し抱へんと承まはり三郎兵衛大坂へ入城致し輪久伴左衛門の手に就て慶長元和の兩度の戦いに數度の功を現はすと雖ども豊臣の御運の末にて木村長門守は河内若江で討死なし後藤基次は譽田八幡の森にて討れ塙團衛門直行は泉州檜井口にて討れ大坂の名士枕を列べて討死なす時に元和元年五月六日遂に落城死に後れたる三千余人輪久を大將として各々必死を極め伊井掃部頭の御支配へ討ち入つたり流石武勇の伊井家にて不意を討たれ各々死を決したる者共なれば討てども突けども物の屑とせず死骸をば刎ね越へ飛び退き千騎が一騎になればとて引くな進めと

切り立たり伊井家の同勢は惣崩れとなり二十七八町敗走なし味方の面々ツレ戦いは勝たるぞと踏み込み切り立たり、此時横合より一挺の鐘太鼓と諸共にサツト下れる旗の手を見れば地白に黒き鬼馬の旗猩々緋に金糸を以て正八幡大菩薩と縫い上げたる大幟銀に天地方圓の午印同勢凡そ一千餘人潮の沸くが如くに詰め寄する固より覺悟の吾々なれば兵を二手に分け、一方は伊井家の同勢と戦い一方は横合より攻め寄せたる藤堂の人数に向ひ茲を先途と切り結ぶ、此時一人騎馬武者槍を捻つて三郎兵衛に突き掛る心得たりと三郎兵衛馬を左りへ乗り開き馬上に於て槍を捻り暫しの間渡り合ふ然る處る三



郎兵衛が突き込む槍に敵の股を健かに突き既に敵は馬より落ちんと  
なしたるにぞ今一槍突かんとせしに後ろに聲ありて其敵受取候と  
後ろの方より突き込んだり心得たりと馬を向け替へ又々槍を合する  
事三十餘騎敵方より致して大音にイザ寄れ組まんと申せし故云ふに  
や及ぶと槍を捨て馬上に引組み揉合いしに鞍に餘つてドウと落ち下  
になり上になり暫しのほは組み合ししが敵は古今の剛力にて云ひ  
甲斐なくも三郎兵衛數度の戦いに身心疲れ遂に其の場へ組み敷かれ  
刎ね渡さんとなすと雖ども敵は宛然盤石の如くなれど此方は必死の  
場合、何おめくと首搔れんや敵は漸々鎧通しの刀を抜いて首をか

んと誤つて切り付けたるが眉間の疵、然る處ろ先手に又々火の手  
上り大坂方より三千餘の新手を入れ替へドツと喚いて押寄たるに彼  
の敵は三郎兵衛を打棄たる儘馬にひらりと打跨り眞一文字に先手を  
望んで立ち去つたり三郎兵衛は漸々に一命助かり眉間の疵の痛むを  
堪へ這々の體にて退散せしは此上もなき武門の耻辱言上致すまいと  
存せしが刀に掛ての御意なれば申上ぬも御不興ならんと包まず言上  
いたせしが返すくも面目なき次第にムります。

「ウム其時其方を組み敷きし敵の扮装覺へ居るか。」

三組敷かれしは夜中の事、毛糸も定か分らねど火の手が上つて馬



に乗り眞一文字に駈け出せしを振り返つて見てあれば紫シソゴの鎧  
平押の兜馬は連錢足毛槍は檜柄十文字の槍でございました。」

大「ウム組み敷かれた其方は黒糸緘の鎧にて夜中の事ゆゑ明白とは  
分らねど黒の扮装火の手ら上りし其時にチラリと見しが金の御幣の  
差物を腰に差しては居らざりしか。」

三「如何にも仰せの通り金の御幣の差物を……。」

大「ウム珍らしや我家老藤堂式部老人にして一人の剛敵に遇い身に  
深手を負ふて馬より落ちんとなしたるは斯く申す大學が十八歳の初  
陣にて其敵受取候と聲を上げ暫らく槍を合せしが槍術稀代の名人

にして中々尋常の戦いでは勝を得る事覺束なしと思ひしかばイザ引  
組んと引組んで首をかゝんと致せしがソハ其の方であつたるか、ア  
、適ばれなる汝の武勇……時に内藤家此者は當家にて高を何の位  
ゐ。」

といはれ四石二人扶持で抱へて居るとは云はれないからウムと内  
藤様は息詰まつたが

内「エー三百石に抱へて居ります。」

大「ウム三百石では惜しい侍今日の恐悦を以て何卒此三郎兵衛を大  
學に下され其代りに先日思召された正宗の名刀彼れを貴公に進上致



す、どうか三郎兵衛は賜はりたい。」  
と茲にて藤堂様の御抱へとなり、益々立身して後に千五百石の主人  
となりました(一説に伊井掃部頭の御家來とも申します)是を名付て  
馬場の出世の盃と申します

楠の泣男

泣くといふ事は不吉のものでムいまして人様のお嫌ひ遊ばす事、  
又た笑ふ門には福來るなど、申して笑ふといふ事は誠に結構なもの  
で御座います併し此の泣男は敵を欺むいて遂に北條の大軍を打破り  
之が爲に一度び一天萬乗の君の宸襟を休め奉りました楠が勝戦を  
得たと申します、されば之を却つて笑い男といつて然るべきでムい  
ます、是は其の河内國千早へお移りに成りまする節御領分堺へ立札  
をばなされ、一藝一能ある者は召抱へるに依つて早々願ひ出るとい



ふ事を沙汰し、其の掛りは神宮寺太郎左衛門早瀬右衛門の兩人役所  
を出來まして申出る者を待ち構へて居りますと或る日の事年齢二十  
九春の高い色の黒い漁師然たる男が入り來り

○「お願ひが御座います。」

太「何だ。」

○「一藝一能之有者は御抱へ下さるの、御沙汰が御座いましたゆゑ  
私しは一能御座いまするに依つてどうぞお抱へを願ひます。」

太「ウム其方の能と云ふは何だ。」

○「左様でございます私しの藝は水を泳ぎまするのが藝で是は水練

といつて水底を潜つて敵陣を伺ひ或は敵の船を覆へすなぞ凡そ水中  
に於ける業は何なりとも自由自在、河童に水練の弟子が十一疋もあ  
るほどの私し、どうぞ早速お召抱へを願ひ度う存じます。」

太「ウム水練も藝の中ちや召抱へて遣はさう。」

時に又一人

△「へエ私しも一藝之有ますに依てお抱へを願ひます。」

太「其方の藝は何だ。」

△「私しは木昇りで。」

太「成程木昇りも藝ちや敵陣の様子を木に昇つて見極めるなど中々



年中ねんぢゅうに必用ひつようなものである。」

と是これも直すぐにお抱かへに相成あひなる、夫それから又またた五日かばかり經たつとデツプ  
リ肥ふとつた年ねん齡けい二十八にじゅうはち九くの男をとこ

◎「恐おそれながら私わたくしは一藝げいある者ものゆゑお抱かへを願ねがいます。」

太なん「何なんの藝げいぢやな。」

◎「へエ私わたくしは先まづ藝道げいどうでは一はん番ばんすばらしい藝げいで。」

太なん「どういふ藝げいだか申まを立て。」

◎「私わたくしは大飯喰おほくひくひで。」

太なん「何なんだと飯めしを喰くふのを汝われは藝げいと思おもふか無藝大食むげいたいしよくといつて昔ひかしから大おほ

飯めしを食くふ奴やつに役やくに立たつた者ものはない、第一だい兵糧ひやうりやうが盡つきて何なんの益えきにもなら

ん先まづ四よ碗わんの飯めしを食くふ所ところを三さん碗わん食くらつて其その一いち碗わんを種米たねこめにして畑はた之し植う

ね附つける時ときは一いち粒りゅうの米こめより一ほん本ほんの稻いねが生しやうじ其その一ほん本ほんより多おほくの米こめを生しやう

じ三年ねんも經たつ内うちには一べう俵べうとなる小食せうしよくの者ものは身しん體たいも健けん全ぜんなるが故ゆゑに自おの

づから長命ながいきをするが譬たとへにも大食たいしよくの者ものは短命たんめいといふ事ことを申まをすではな

いか、左様さやうな者ものを召抱めしかへれば害がいになるとも益えきにはならんから其方そのほうの

申まを込しは相叶あひかなはんぞ早さうく下され。」

と叱言こいごを云いはれて其儘そのまゝ下さつて仕舞しまつた、夫それより二十日かばかり經たつて又また

た一人にん



◎「恐れながら願ひ上ります。」

太「ア、暫らく暇であつたが何か又た参つた……コレ……其方は何の藝がある。」

◎「へエ私しは泣男で。」

太「ナニ泣男、妙な奴が参つたな貴様が泣くのか人を泣せるのか。」

◎「へエ私しが咄をするるとどんな者でも真に迫つて泣かぬ者は無い  
ません。」

太「フーム一ツ夫でやつて見る。」

◎「へエ。」

と其男が咄出すと初めの中は別に何ともないが次第に真に迫つてホロ／＼と涙を流して物語るを思はず知らず役人二人も涙を催はし感心いたして

太「是はどうも妙だどうしても貴様は泣て居るやうに見えて思はず我々も涙が溢れた。」

◎「私しが話をするるとどんな強い御方でも御泣なさらん者は無い  
せん。」

太「是は面白い辨舌を以て敵を欺むくといふは不思議。」

と此旨早速正成公へ申上りますると正成右の泣男を召されて其の咄を



ば聞かれると、自然くと哀れを催はし流石の豪傑も思はず袖を濡  
しました、正成大るに感服せられて

正「其方は領分の杉本村の者ぢやといふから、今日より杉本といふ  
を苗字に取り杉本佐兵衛と名乗り七十俵を以て召抱へ遣はす。」

佐「へエ、有難い仕合せに存じます。」

と是から神宮寺太郎左衛門が新參披露の爲め御家老方を連れ廻りま  
した先づ第一に恩地左近次に安間了寛、楠帶刀其他御家老衆、重役  
方を夫々引連れて参ります中に、茲に八尾の薬師堂の別頭顯孝とい  
ふ人の許へ連れて参りますると此人至つて御酒好でムいまして家來

を對手に酒を飲んで居る處へ太郎左衛門が例の杉本佐兵衛を連れて  
参りました

太「申上ります。」

顯「何だ。」

太「此の者は今度召抱へられました泣男でございます。」

顯「ナニ泣男、夫は面白ひ、シテ何か、此の男が泣くのか。」

太「へエ泣く真似の名人で此の者が話をするるとどんな者でも感じて  
涙を流しまして、上に於ても頻りに御落涙ありしほどの事でムいま  
す。」



顯「乃公は昔から泣いた事がない頭は此の通り丸くつても腹の中は八角で物の憫れといふを感じた事がない、一つ此の顯孝を泣かして見ろ、若し乃公がホロリとでも涙を溢せば眞の泣男だが泣かない時に於ては是れ敵の牒者に違ひない、久しう人を殺さんで本意なく思つて居る折なれば是れ幸ひ此の鐵の棒を以て汝の頭を打のめすから左様心得ろ。」

佐兵衛は驚ろいて

佐「へエ、左様なれば私しが話をして貴所が涙を溢しなさらんければ私しの頭をお殿ちなさいますか。」

顯「ア、殿つ。」

佐「殿ては死にますな。」

顯「固より死ぬ。」

佐「死ぬほごに殿たれ、ば血が出ますな。」

顯「其の血の迸ばしるのを見るのが宜い心持だてな、コレ家來共、今乃公が此の男を殿ち殺すのを肴に酒を飲むが宜い。」

佐「夫では若し私しが話をして貴所がお泣なすつたら何うなさる。」

顯「乃公の首をやる。」

佐「貴所の首を頂いた所が仕方ありません私しは今度百姓からお



取立とらたてになりましてもまだ肝心かんじんの大小だいせうがムいませんヒヨツト私わたくししが話はなしをして貴所あなたがポロリとでも涙なみだをおこぼしなすつた其その時ときにはアノお刀掛かたなかけに掛かつて居ゐる小大だいせうを下くださいまし。」

顯あき夫それは往いかんアノ大小だいせうは大切たいせつな寶たからであるからやる譯わけには往ゆん。」

佐それ夫それでも貴所あなた首くびをやるあなたくびと仰おつしやつたではありませんか幾いくら貴たつとい品しなでも首くびに代かへる物ものはムいません、私わたくししも命いのちを的まとに致いたすのですから貴所あなたの方ほうでも私わたくしの望のぞみを叶かなへて下くださらんといふ事ことはムいませすま

顯なるほど成程しか、然しからば宜よし若もし乃公おれが泣なけば那あの大小だいせうを汝なんぢにやるから、

どんな話はなしをしたつて乃公おれが泣なく者ものかやつて見みろく。」

佐じんぐうじ「エー神宮寺じんぐうじさんへ申まをしあ上あます、貴所あなた證人しやうにんに立たて下くださいまし。」

太よ「宜よしく乃公おれが證人しやうにんになる。」

佐さ「左様さやうならば話はなしし出だします……エヘンく、世よの中なかに憫あはれな物ものは數多かずおほけれど中天竺ちうてんじく曼陀羅まんたらか國こく漁梵ゆんぼん天皇てんのうの御子おんこ悉陀しつた太子たいし、天竺てんじく國こくの政せい治上ちじやうの事ことに就ついて、天子てんしの御子おんこでありながら檀特山だんとくせんに登のぼり玉たまひ況まして神僧しんそう阿羅あ、仙人せんじんの呵責かしやくを受け艱難かんなん辛苦しんくして遂つひに釋迦牟尼尊しやくかむにそんとなり玉たまひ、是これ佛法ぶつぽうの祖そたる事ことは皆みな人ひとの知しる所ところでムいます。」

顯だま「黙だまれ然そんな事ことで乃公おれが泣なくと思おもふか天竺てんじくの釋迦しやくかが何なんだ、公乃おれも



坊主だけれど然んな話で泣くやうな人間ではないワ、愈よ此奴牒者に極つたり、覺悟致せ。」

と顯孝が鐵棒取て杉本佐兵衛が腦天をば打碎かんと爲したる體

佐「アイヤ暫らくお待ち下され只た一言申上る事の候。」

顯「イヤ〜卑怯を申するな。」

佐「卑怯は申候はず只た一ト言臨終の一言お聞なされて下さりませ。」

顯「ウム人間が死に臨んでの一言を聞んといふも眞の武士の本意ならず、何なりと云へ聞て取らせん。」

佐「さらば御聞下さるか有難き仕合せに存じ奉つる。」  
と膝立て直し身構へながら話に掛りし其の様子今までの杉本佐兵衛とはガラリ變つて生れ替つたかと思ふばかり

佐「恐れながら某しは御領分の百姓杉本村佐兵衛と申せしは眞赤の

偽はり北條相摸守高時入道宗監、高三萬石神崎越前の一子神崎小次

郎正章が成れの果父越前守は北條相摸守高時の非道を嘆き和漢の例

を引き種々高時を諫むると雖ども更に用ゐず、天子に對して數多の

不敬、人民を苦しむること一方ならず、茲に又大佛陸奥守定時と

云へる者、己れが娘を高時に配し親子心を協せて高時を欺むき恣ま



に悪業を爲さしむ之に依て大佛の悪業を高時入道に申入れしに却つて忠臣を讒するとあつて定時の手に誅戮を加へられ家は忽ち改易となり是非なく家來も散々離々手前も母と打連れ立ち何れを差して行く的も嘆きに沈む老母をなだめつ御領の杉本村に家來の來り住めを聞き隈なく探ね廻れども家來の行衛は更に知れず、如何はせんと思ひしが兼てより楠公は御情深く在すると承はり暫らく親子兩人が杉本村に足を留め、農業に身を委ねて聊かに露命を繋ぎ居る中一能一藝これある者は召抱へるとの御沙汰ゆる、私しは性質泣眞似を致すに妙を得て話をすれば忽ち感じ人々落涙せざる者なし然れば

此度御役所へ願ひ出で御召抱へを求めしに士分以上に取立られ、思ふに勝る身の幸ひ嗚呼有難や忝けなや、さては草葉の蔭よりして父越前が手引にて楠公の家來となり、遠からず勅命に依て義兵を揚げなば北條の大軍へ切て入り高時初め大佛が首打落して父の仇報ひ呉れんと樂しみ罷りあつたるに其の甲斐もなく顯孝様の鐵棒の許に命を落す残念さ、我れが命は惜からねど病みほうけたる母親の介抱をば誰かせん、又た父越前が無念を晴す事能はず、嗚呼残念や、口惜や、命冥加の陸奥守討ち果さぬは是非なけれど、せめて貴所が手に掛て彼が首を打取り玉ひ親子の無念を晴してやらんと一言御意召さ



れ、ば夫を土産に冥土へ参り、父越前守に遇ひ、事の次第を咄しな  
ば嘸や嘸満足に存じ候はん、シテ此の委細を認ためて母の許へも贈  
りたし、夫だけの御猶豫下され度し。」

と涙を流す事雨の如く頻りに八尾の顯孝に嘆き絶る有様は實に哀れ  
なる體爲顯孝怒れる兩眼を思はず閉ぢてハラ／＼と涙を流し

顯「さては神崎の一子小次郎なるか北條高時の家來に神崎越前守と  
いへる者、主を諫めて相果し適ばれ者よと蔭ながら賞め居たりしに  
豈圖らん越前の一子小次郎に此の處にて對面なし、其の首をば討落  
すは不便の事と知りながら武士の約束是非もなし其の代りには顯孝

が汝に代つて陸奥守を討取て遣はさん。」

と八尾の顯孝ハラ／＼と思はず涙をば流したゆゑ

佐「ハ／＼アハツ顯孝様大小を頂戴。」

顯「ナニ。」

佐「大小を頂戴。」

顯「何故。」

佐「何故と仰しやつて今私しが神崎越前守の一子小次郎だと申した  
らば貴所は兩眼からハラ／＼と涙をお流しなされソレ涙が鼻に傳は  
つてパラ／＼落ちて居るぢやアありませんか。」



顯「然らば汝が越前守の一子小次郎といふは。」

佐「至たくは眞赤の偽り矢張り杉本村の百姓佐兵衛でムいます。」

顯「ナニ百姓の佐兵衛だと。」

佐「へエ、然う云はなければお前さん泣きませぬ何うです顯孝さんやられましたらう。」

顯「成程其の道を以て持掛ければ鬼神も泣くな、ア一旨いものだ、實に感服致した流石館の御目鏡にてお抱へなされし泣男其の辨舌を以て敵を欺むき破らんは遠きにあらず、嗚呼適ばれなり、杉本佐兵衛大小は其方に遣はす、乃公が秘藏の大小を持って行かれては、甚だ

顯孝閉口を致す。」

是が世にいふけんこうを害すと云ふのでがなあらうと洒落られたか何うだか知れませんが遂に辨舌を以て敵の大軍を破るの手引をなしたりといふ即ち楠の泣男といふは是でムいます



宿 直 袋

三州吉田の城主松平伊豆守信綱公幼名を大河内長四郎と申されま  
 して十一の年に三代公のお對手役を仰せ付られました、三代公御幼  
 名を竹千代丸様、其の竹千代丸様の乳母は春日の局と申されまして  
 齋藤内藏助の娘でゝいます(後ちに麟祥院殿と申されました)竹千代  
 君お守のお役は土井大炊頭利資、酒井讚岐守忠勝、青山伯耆守行成  
 是を智仁勇のお守役と云ふ御對手として大河内長四郎、堀田庄五郎  
 (後に加賀守正盛)阿部鐵丸(後豊後守忠秋)是れ智仁勇の御對手、水

は方圓の器に従がう、御明君に成らせられるのに相違ゝいません、  
 是は皆駿府に於て家康公が孫竹千代の守は誰々乳母は誰對手の者は  
 誰々と御認ため遊ばして江戸表へお贈りになりました、實にお見立  
 の程恐れ入た者で、或る時朝早く竹千代丸様は二代將軍様の御居間  
 のお廊下を大河内長四郎、堀田庄五郎、阿部鐵丸の三人を供にお連  
 れ遊ばして御通行の折柄に御屋根の瓦の處ろに雀がチウ〜と五六  
 羽囀り居りますのを御覽遊ばして竹千代君は

◎竹長四郎〜。」

と召されました、其の時に竹千代公は十歳大河内は十三歳、堀田庄



五郎十二歳、阿部鐵丸は十一歳年増故長四郎を召されました

「竹、彼の雀を取り呉れ。」

是を承たまはり長四郎は

長「我が君様の仰せにはムいしますが雀を捕りに参りますと晝の程

は上様のお叱言もあり役人が是を尤めます故今宵は長四郎御泊番

にムいます故ソーツとお居間の御屋根に上り雀を捕りまして明朝迄

に献じます故何卒明朝までお待ちの程を願います。」

竹「ア、左様か然らば明朝までに捕り呉れよ。」

と仰しやつたまへズットお行過に成りましたが是は明君の生立でム

います、下方の子供は捕て呉れ、と云い出すと

○「ウーム捕て呉れ捕て呉んねエと承かねへや捕て呉れ。」

と泣いて騒ぐ處が今宵泊り番でムいます故明朝迄に捕て献じます

と一聲言ふと左様か然らば明朝までに捕り呉れよと素直に仰せられ

ますると云ふは是れ御明君のお兆しでムいます、長四郎は明朝迄に

献じますと竹千代丸様へ申上げました故どうぞいたして雀を捕ら

へて明朝献じたいものだと其の夜更闌るを待ち(後ちに智慧伊豆と

お成り遊ばすお方ゆへ)年よりは體が小さうムいますが何處をどう

上りましたか御居間のお屋根へ這い上り雀の巢と思ふ梁の處ろへ参



りまして静かに左りの手を瓦の上につき右の手をば差し入れまして  
雀を一羽握りました雀も寝込んだ處ろ不意を食つたから逃げる事も  
出来ません、其の雀を左りの手に持ち替へ又々右の手を差し入れ一  
羽握りました、雀を捕て先づ宜いと心の緩みか絹足袋の辻べりでお  
屋根より致してツル／＼と辻りお庭へドンと落ちました落つる途  
端に兩方の手に力を入れましたから二羽の雀がチウチュツと言つた  
儘握りつぶして仕舞はれましたが握つたなりウーンと氣絶をいたし  
ました御居間でムいますから御殿と違ひ屋根は低うムいますし殊に  
其の一面は蘭の植込其中へ落ちましたのが長四郎殿の運の宜いの

で石の上へでも落ちては堪らん併し其の儘ウーンと氣絶をいたしま  
した處ろ二代將軍秀忠公其頃は御城中でも御手少なでムいますから  
御要害は嚴重でも内々は御質素でムいまして夫れ程に立派でなかつ  
たと見へます、ツシンと音がした故フト目をお覺ましたなされ

秀「惠與々々。」

と召されました(惠與の方と申すは御臺所で是は秀吉公御寵愛の淀  
君の妹で古今の美婦人でムいます) 惠與の方は兩手を支へ

惠「何の御用でムいますか。」

秀「今雨落の方に當りバタリ、チウ、ギウ、と云ふ音がいたしたか



ら是を取調べやうと存ずるによつて其の方を呼び起したが今夜の女中は誰であるか次に控へ居る女中を呼べ。」

惠「ハ、ツ松の尾く。」

とお召しに成りました

松「ハツ。」

と答へて老女松の尾夫へ出て兩手を支へ

松「何の御用にムりますか。」

惠「松の尾、雪洞を點ける。」

と夫から絹地に遠山を畫きました塗骨のお雪洞に燈を點けまして老

女が前に立ち將軍秀忠公白のお召しに白の御帶御小劍を前半に帶され、跡より御臺様が御劍を持てお附でムいます、徳川家御代々の中で白服を召されるのは御實子で御家督に成りませんければ出来ません、紀州より御乗込になつた俗に紀州公方様と申さるゝ八代將軍吉宗公は生涯白の服を召す事が出来ず、又辰の口より御乗船と云ふ事は出来ません夫程格が正しくしてムいます、二代様は申す迄もなく家康公の御實子でムいますから白のお召しで御椽側へ御立ち出でに相成り兩戸を一枚開して塗骨のお雪洞を翳し其處等此處等と御覽なされましたが何にも目に遮ざるものもなしハテ此處等であつたバタ



「ア、チ、ウ、ギウと言つたのは何であらうかと猶四邊りを御覽になると蘭の植込の中に黒の服で打伏になつて居るものがムいます、此の時に長四郎は夜露が喉に通りました氣が付きましたは何分身が痛んで急には立てませんから身體を擦つて居た頭の上へ上様が雪洞を翳して此處等であつたと云つておいでになるからどうで目附れば叱られるに相違ないと度胸を据へて

長「ア、今晚は静な晩だ。」

と突然鼻先へ首を出したから御臺様は驚ろいて跡へ下る

秀「是れ其の方は大河内長四郎ではないか小兒とは申しながら深夜

に至つて予が居間の家根より落ちたるは何か仔細ぞあらん尋ねる次第之れある故是へ上れ。」

長四郎は雀を握つた儘御疊廊下へ上り手を突て首を垂れて控へて居りました

秀「是れ長四郎其の方が握り居る物は何だ。」

長「是れは雀にムいまする。」

秀「ウム其の方は雀を捕りに參つて落ちたのか。」

長「仰の通りにムいます、今日竹千代様のお供をいたし此のお廊下を通りますると雀の子が飛び出だし頻りに餌を拾い居りましたのを



御覽遊ばして、あの雀は善い雀ぢやのうと仰せになりましたから、ア、彼の雀を差上げたらさぞやお喜こび遊ばすだらうと君のお居間も憚からず家來の身をもちましてお家根に這い上りました處の主罰忽ち斯の如く何卒然るべくお仕置のほど願ひ奉つります。」

と言ふ途端に御傍らにおいで遊ばされましたお惠與の方御本腹ではムいませうがお傍でお育てがない故か何うも情合が薄いと見へ夫れとも又外に何ぞ仔細がムいましてか竹千代丸様が悪くつて成らん、尤とも彼君方は大概御自分の手でお育てはないが國松君は仔細あつて御自分のお手許でお育てになりましたから御情合も厚く此の國松様

を御家督に立て竹千代様を御總領除ぞきに仕様と云ふ始終お望みがありますから將軍の御傍に進み寄り

悪恐れながら申し上げます此の雀は竹殿が捕つて來れと申付けたに相違ムいませうまい (阿母様でも竹千代と呼び棄てになられませんのは家康公の御幼名を竹千代君父上の御幼名も同じく竹千代君と申されました、されば之れを呼び棄てに致すは失禮でムいませうから夫故竹殿と仰しやいます) 竹殿が申し付けて雀を捕たに相違ムいません。

秀「ウム悪戯者中々彼奴は不可ん奴が、ア、悪戯では成長の後も覺



束ない第一夜に至つて雀を捕り來れなど、之れなる長四郎に申付けるとは如何に子供なればとて家來を憐れまざる不仁、蛇は寸にして其の氣を含むと家來を悼はらざるやうな心底にては國を治むる事覺束なし之れ長四郎、竹が雀を捕り來れと其方に申し付けたらうな、どうぢや。」

長四郎之を承たまはりましてア、情けない如何なればこそ竹千代丸様を斯く迄にお惡みに相成るか何方も實子にありながら竹千代丸様の事を將軍へ御讒言を遊ばし只今上のお言葉に蛇は寸にして其の氣を含む深夜に至つて家來に雀を捕り來れと申し付けるは不仁の至りて

の上意は是れ御家督の妨たげなり假令命は召さるゝとも竹千代様の御爲に申し開きを致さんと決心なしたる長四郎チリヂリツと進みよ

り

長「是れはしたり全く私しが欲く、されば雀を二羽捕りまして一羽を竹千代様に獻じ一羽は私しが得たく思ひまして捕りましたので竹千代様の仰せを受けた覺へは毛頭△いません。」

秀「其方匿すと雖ども全たく竹千代の言い付に相違あるまい主を詐はる大膽奴之れ其の袋を持て。」

是れは徳川の御城中にお備へになつて居ります宿直袋と稱へまする



正平皮、小櫻皮など、申す革で製した大きな袋で巾着のやうに製らへて紐が付て居ります平常は口を括つて幾個もく重ねてムいます。が火事地震など、云ふ非常の時にお手許の品の散亂しないやうに之れへ收め御土藏などへ入れます、夫れゆる之れを宿直袋と稱へます。其の大なる正平革の袋を取り寄せ御自身に袋の口をお解き遊ばして

秀「之れ長四郎竹千代が雀を取り來れと云いたるを存せん知らんと詐はれば此の袋に入れ置て宅へも歸へさず食事も與へず夫でも其の方には知らんと申すか。」

長「全く私しが欲しく一羽お上みへ上げやうと存じお屋根に登りて落ちたるは自業自得誰にか其の罪を譲りませうや何卒お仕置の程を願ひ上げ奉まつります。」

と更に恐るゝ氣色もなく袋の中へムンヅとばかり居直つたるは中々度胸の据つた小兒でムいます、秀忠公之れを御覽遊ばされて

秀「汝れ強情な小兒ではある。」

とお怒りあつて御臺様と一所に兩方から袋の糸をグイと刮いて葵御紋の釘隠しへブラリとお提げになりました上様は御臺様を連れて御居間へお這入りになり松の尾は御暇を賜はり秀忠公は御褥の中へ



お這入に成り

秀「ア、大層夜が深けた。」

と何か睦まじげにお物語りがありまする時に袋の中で

長「エヘン。」

秀「まだ起きて居るワイ。」

と其の儘お休みに相成りまして夜が明けると上様にはお目覺に相成りお手便も相濟み夫より朝御飯、御臺様はお手便お化粧朝御飯、お化粧だけ御臺様の方が遅れます扱紅梅瀧川など、云ふ女中を連れて御疊廊下へ在らせられる

惠「彼の革袋を下せよ。」

との仰せ頓て女中が否の袋を下さうとするとブーンと香つたから

紅梅「ヲヤマア此の中で麁相でもしたのではありませんか（豈もそんな事をする小供ではムいません）」

さて革袋を下し口を解いて見るとまだ雀を握つて居て放さない其の手で眼をこすり乍ら

長「お早うございます。」

惠「長四郎。」

長「ヘイ。」



惠「昨夜雀を捕りに上つて誤まつて蘭の植込に落ちたるは竹殿より捕り來れと言ひ付られたのであらうな。」

長「昨夜より再應のお尋ねでムいますが全たく私しが欲しく一羽は竹千代様へ差上げやうと存じ御屋根へ昇り誤まつて落ちたに相違ム  
いません。」

惠「コレ其の様に強情を張る時には何時迄も食事も興えず宅へも歸さんぞ申せば食事を遣はすがどうぢや。」

長「左様ならば仰せに従がい實の事を言上致しませうが何分にも空腹致し思ふ様に口もきけません假令お握飯にても宜しうムいます故

頂だきますれば夫にて言上仕つりまする心得でムいます。」

惠「ア、左様か然らば瀧川、握飯を取らせろ。」

瀧「畏こ参りました。」

と直ぐに御膳所へ申してやりお握飯にして三盆のお砂糖をかけ利休箸を添へて持ち來たりました

瀧「サア上からお握飯を下さるから有り難く頂戴致されよ。」

長「瀧川さんお替り付でムいますか。」

瀧「なんと。」

長「イエお替り付でムいますか。」



瀧「黙つて御いでなさい。」

長「へい全休是れは唐三盆の御砂糖を掛るよりは鹽握飯にした方が  
お旨しいので第一之れは小さい。」

瀧「そんな事を云はづにお食べなさい。」

長「へい。」

とペロリと食べて仕舞う

瀧「サアお握飯を戴だいたから申し立てたがよい。」

長「へいまだお握飯を頂だきません前は頂だいたら申し上げやうと  
存じましたところを腹のよくなつた故かつい忘れてしまつて申し上

げるのが否に成りました。」

と空嘯ふいて控へたる様子御臺様はハツトお怒りなされ御疊を蹴立

て、二代將軍の御間にお出でになりました尾に尾を附けて二代様へ

申上げましたから二代様も殊の外にお憤をほり

秀「悪くい奴だ長谷川丹後、長四郎を引け手討に致す。」

と仰せられ義光の御劍を提げ席をお立ちに相成りました、長谷川丹

後が疊廊下へ來つて見ると長四郎は宿直袋の中で兩手を膝に突て控

へて居ります

丹「是れ長四郎其の方御臺様に對して不敬の一言將軍家に於ては殊



の外お憤はり遊ばし其の方をお手討に成さるとの事最早逃がれんに

よつて覺悟をいたせ。」

長「元より覺悟はいたして居ります。」

丹「其の方の父大河内金兵衛には某し舊來の懇意何か父に申置たい事があらば遠慮なく是にて申せ、父金兵衛に申し繼いで遣はす。」

長「何にも申し置く事は△いません侍たるべき者が忠義の爲に命を落すは本望で△います死したる後にて此の長四郎が志ざしは相分るで△いませう只お手討になる其時に惡俯をせず兩手を合せ上様の御手にかゝりしと一言父に仰せ聞け下され度く、折から母は病氣にて

長四郎が御手にかゝつたと承たまはつたならば母の慨きは如何ばかり夫が爲に病氣も重り一命にも拘はりはしないかと夫のみ心配になります。」

長谷川丹後是を聞て涙を流し

丹「ア、天晴なる其の覺悟丹後慥かに承たまはつた。」

と長谷川丹後は長四郎の手を取て御前へ同道して參りました、長四郎二代様の御前へ兩手を突て控へましたから御帶刀の柄に手を掛けハツト御覽なさる、と小さな手にて後れ毛を搔き上げ是より召せと言はぬばかりの有様、御仁心深き御方故思はづハラ〜と涙を流し



秀竹千代たけちよが深夜しんやに及んで雀すずめを捕れと申し付けしは家來けらいを悼いたはらぬ不仁ふじんにして天下てんかの相續さうぞく覺束おぼつかなしと申せしを家督かとくの妨さまたげと心得こころえて主人しゅじんを守護しゆごする汝なんぢの誠忠せいしゅう竹千代たけちよにもまれ國松くにまつに、もまれ頓やがて家督かとく相續さうぞくの折柄をりからに是これを守護しゆごして天下てんかの政事せいじを預あづかる者は此この長四郎ちやうしろうより外ほかにはない此この度の事ことは免ゆるし遣つかはすであらう。」

と柄つかに掛玉かけたまひし手ても其その儘ままにお放はなしなされ却かへつて悉ことむとくの御賞美ごしやうび夫それより年としを経て松平まつだひら右衛門ゑもん太夫たふ政綱せいさうの養子やうしとなり松平まつだひら伊豆いづ守信綱のぶのぶつなと申まをされしは即すなはち此この御方おかたでございます、之これ徳川とくがはの七松平ななまつだひらの中長澤うちながさはの松平まつだひらと云いふは此この伊豆いづ様さまのお家いえでございます、扱さて此この人ひと遂ついに御老ごらう

中ちゆうとまで相成あひなり頗すこぶる評判ひやうはんの宜よい御方おかたでございましたが天草事件あまくさじけんには少々せうくわ遣り損そこないました此この御方おかたが味噌みそを付つけましたから伊豆いづ味噌みそと云いつて此この時ときより始はじまつたと云いふ譯わけでもございますまいが併しかし大層たいそうな御器量人ごきりやうじんでございました



馬 揃 ひ

是は松平土州公の御先祖のお話で、茲に織田上總介信長公の御家來に山内亥右衛門一豊と云ふ人が、小身では、但し武藝も能く出來、學問も勝れて居りましたが、まだ立身を致すると云ふ譯にも往ません、如何にも貧窮で、貧は諸道の妨げと申す、すが實に夫に相違、いませ、右の亥右衛門の妻はお八重と申しまして、若宮新助と申す者の娘、此の人は山内亥右衛門より身分がズツと上の人で、此の八重と云ふ娘が

八重、どうぞ私しは山内へ嫁したう、いませ。」  
 と父に申ました時に、父が亥右衛門は小身で、云ふ處へ其の方參ると、水仕の業をしなければならん、女中を置く力もないによつて、其の方萬端用を致さなければならん。」  
 八重、父上様の仰せでは、いませ、夫に仕へまして、水仕の業を致すのは、世間の女子の常で、いませ、儉約を第一にして、針仕事等も他に出さず、假令身苦しいものでも、奇麗に致して着せすまるのが、婦人の嗜みかと、私しは心得ます、是によつて、私しは山内へ嫁したう、いませ、必らずや、此人立身をして、名を揚げます程の者に、相違、いませ。」



と實に八重子殿は能くお見立なさいましたされば當時土佐國高知の  
 大守二十四萬石松平土佐守殿とおなり遊ばされました、當主が九州  
 に清洲に信長公お出での節亥右衛門一豊御城下へ参りまして丁度晝  
 八ツ頃に立歸つて参つて何にも言はず兩手を拱ねき頻に嘆息をして  
 居りました、夫の機嫌の悪いによつて妻の心配は一方ならずお茶を  
 お飲んなさいと出して返辭もしない  
 八重貴君は大層御心配の御様子でムいますは何事かお氣に障りまし  
 たのかどうか連添私しの事故御相談をなされますれば有り難い事に  
 存じます。」

亥「イヤお前に話をした處が益もない事只一人で嘆息をして居る迄  
 の事だ。」  
 八重「さう仰しやると尙更私しは何がいたうムいますどうぞ仰しやつ  
 て下さるやうに。」  
 亥「然らばお前に話しをするが外の事ではない今御城下へ参ると馬  
 市で年々歳々春に一度秋に一度と馬市が建て國々より馬口喰と申す  
 者が馬を引き來り白もあれば黒もあり栗毛に加茂河原毛連錢韋毛等  
 と種々なる馬を賣り居る侍と云ふ者は馬の宜いのがなければ戰場で  
 充分に働らく事が出來ない者だ、他の馬を借りて戰場を乗り廻す譯



にも往す、騎馬組なれば上の御馬を拜借して戦場に出られるが騎馬組でなければ上より御馬を拜借する事も叶はず、戦場に徒歩立では充分に働らく事は出来ん弓馬體鎗劍と云ふが戦場で第一に馬だ、進退の掛引は馬が悪ければどうしても往んものだ、今黒の馬にて七騎程ある九戸立に相違ない立髪は飽までも縮み上り左右の耳は桑耳を付けたるが如く元暦の昔し、宇治川に立花の尾島の崎より乗り出だせし梶原の乗たる磨墨にも優るとも劣らざる馬故直段は如何程と云ふと吾身装の悪さを見て何此者に此の馬が買へる者かと云はぬばかりの様子如何にも残念と存せしが押し返して代價は如何程と尋ぬる

時、セ、ラ笑つて、ハイ黄金二枚でムるといつて横に顔を向けたる其の面悪さ併し先方の馬なれば如何とも詮方なし黄金乏しければ交り薄しと云ふが、馬賣の下郎にさへ斯く侮られる残念さよ久しく病氣で些かの蓄へも失ない有に甲斐なき吾身の上と思はず知らず嘆息致したのである。

八重「アノ黄金二枚あれば其の馬をお求めになり戦場にて充分のお働らさが出来ますのでありますか。」  
亥「如何にも。」

八重「左様なれば私しが金子を貴君へ差上ませう。」



亥「是れく八重金と申しても齒を染める鐵漿とは違う又た臺所にある庖丁ではない。」

八重「之れはしたり黄金と申ますれば通用の金子でムいませう。」

亥「如何にも。」

八重「左様なれば私しが差上ませう。」

と立て行から何をするかと見て居ると一面の古鏡を取り出だしまするから

亥「ハ、ア利口な様でも扱は女だ金ぢやと申して鏡を持ち出して何をするであらう、併し何故鏡を持ち出だせしか。」

と見て居る中に鏡の蓋を取り頓て其裏を反へすと白き紙にてベツタリはり付けた物がムいます是を取り出だして中より黄金二枚出し良夫の前に丁寧ていねいに兩手を突き

八重「サア此の金子を以て馬を求めてお出で遊ばし戦場にて御功名を遊ばされ忽ち御立身を成されまして富貴の身の上にお成り遊ばしませよ。」

と差し出だしましたから亥右衛門一豊は夢かとはばかり黄金を見詰て暫し言葉もありませんでしたか頓て一豊は

亥「如何して此の金子を其方が鏡の裏へ入れ置いたのである。」



八重「左様でムいます私しは貴君様の御氣性と武藝と御勇氣を慕ひ強  
て父に申して此方様へ嫁しましてムいます、其時母が黄金二枚を私  
しに呉れまして此の金子は良夫の大事な時に出せ其方には里から致  
して幾分か金子を遣はす故良夫の身の上用ゐると云いつかりまし  
た所ろ只今貴君のお言葉に馬があらば戦場の掛引自由にして功名を  
現はすとの事ゆへ、其の御覽成された黒馬を求めてお出で遊ばされ  
よ。」

と差し出だしました時に亥右衛門殿

亥「ア、適ばれなる其の方見ん事之れにて馬を買ひ求め戦場にて大

功を現はすであらう。」

と黄金を持って城下へ参り頓て馬喰の許へ参りまして

亥「馬喰。」

馬「イヤ又た來やアがつた。」

何度召んだつて買ひもしないものを此んな野郎に挨拶をして無駄だ  
と云ふ様子で返辭もしない

亥「コレ馬喰。」

馬「何ですエ。」

亥「黄金二枚にて馬を買つて遣はすぞ。」



馬へ、エ旦那戲談言つちやア不可ません黄金二枚と云へば大變な  
ものですぞ。」

亥「是武家に向つて不禮の一言黄金二枚持ち來つたによつて馬を買  
といふのだ見ろ。」

馬「へッ成る程、是は恐れ入りました眞平御免下さいまし。」  
と頻りに馬喰は詫まして

馬「左様なれば旦那様貴郎が之れを引いて入らつしやるのも訝しう  
ございますからお屋敷まで私しが引いて参りませう。」

亥「イヤさうして呉れ、ば忝けない。」

と夫より馬の口を彼に取らせ自分は先に立て屋敷へ歸りましたが馬  
を入れる處がないので之れには甚だ困却致しましたが仕方がないか  
ら若宮新助の家へ参つて頼みました是は馬もムいます故妻の志を  
話してどうぞ御廐を拜借したいと云ふと新助も娘の操を大きに感服  
し夫に就けても妻が娘にやつた許りで娘が此の操を立てられると吾  
が女房と娘の志を感じましたが此の若宮と云ふ人も後に丹後守と  
なつて諸侯の列に加はりました人故亥右衛門に家を造り金をも與へ  
能く目を掛けて遣はされました扱て夫より戦場に於て屢々功を現は  
したが爰に天正の五年信長公が馬揃いと云ふ事を遊されました其の



馬揃いと云ふは御家來方が物の具を付けて馬上にて御馬見場を乗り廻はし誰の馬は何誰の馬は何とお書き留になります一つは馬術を御覽なされ一つは乗馬の善惡の評を致しまする、信長公は御馬見所にお立出でに相成り御家來方の乗り出づるを御覽に相成て居りますと第一番に柴田修理之助勝家静々乗り出だしたり其日の装束は紺糸海老胴の鎧同じ毛糸を五枚鍔鎧白星の兜金にて二つ雁金の前立眞廂に輝き連錢足毛の駿足に黒鞍を置いて打跨がり淺黄二反の鞆紫の手綱をかいくり悠々として乗り出だしたるは流石織田家の執權鬼柴田と云はれる程あつて武者振美事に相見へたり第二番に乗り出だせしは

崩黄糸の緘の鎧同じ毛糸の翁形の兜を頂き金銀ちりばめたる陣刀を帶し加茂川原毛の駿足に打跨がり乗り出だせしは池田庄三郎信輝第三に乗り出だせしは大童の鎧桃形の兜繼毛の馬に打跨り乗り出だせしは前田又左衛門利家夫より思い思ひの装束にて二十三騎乗り出だしたり少しく間だを置いて二十四人目に乗り出だせしは小櫻を黄に返したる鎧に獅子頭の兜金の一輪牡丹の差物なして乗り出だせしを信長公キツと御覽遊ばされて御聲高く

信一豊待て。」

亥ハノ。



と馬上に於て兜を取らうとするのを

信「イヤ取るに及ばずア、美事な武者振汝夫にて騎射を致せ、弓矢を亥右衛門に遣はせ。」

と弓矢を亥右衛門に下され

信「那須の與市の例に倣い扇子を射れ。」

と兼て亥右衛門の射術に勝れしを御存じ故遠山の畫きし軍扇を矢頃を量つて御家來に仰せ付けられて築山の方へお挿しなされ亥右衛門の射術を御覽になると織田家の諸士方はこは善き一段の見物と左右に馬を乗り開き片唾を呑んで見物なす亥右衛門一豊は武門の譽れ何

卒扇を射て與市の二の譽れを取らんとし思い遙かに馬を乗り下げて御前に向つて一禮なし夫より馬場の廻りを七度八度乗り廻はしました其の馬術をば人々感服致して見て居ります中に馬上に於てエイと聲を揚げると見へしが足を揃へて右の方からパツ、パツ、パツと乗りに出だし馬上に於て弓矢をカツキと打ちたる其の弓は重藤にして矢は鶴の元白を以て作りたる十三足の騎射矢なり弓に矢を打番へ満月の如くに引き絞れり靦い定めてヒヨウと射る矢尻は違はず扇の要をガチリ射ると右の扇は風の間にく〜ヒラ〜と飛び上る有様は昔し與市の扇の的も斯こそあれと同音にドツと賞めたる聲は暫らく鳴りも止



まざりけり信長公のぶながこう

信「一豊近う進め。」

と云ふ御意、一豊は兜を拂ひ御前に兩手を突くと

信「適はれなり一豊信長承はるに汝の妻は若宮丹後の娘にして利發

の由に承知致す男子たるべき者は妻の善いを持つのが生涯の寶是

を其の方に遣すゆへ汝の妻八重に取らせろ。」

と仰しやいましたたが彼の黄金二枚の一件を兼ねて聞き及んでお出で

なさるから結構なる御品を賜はりました今以て土州家のお寶に相成

て居ります、此の八重子に又一つの話しがムいます慶長の五年關ヶ

原御一戦の際伏見の落城其頃は遠州掛川に大名の奥方は皆大坂にお

留まりで伏見の落城を聞て家來を野州の小山御陣にお供をしてお出

でになる夫亥右衛門一豊の方へ落城の始末を御通知致さうと思ふが

必らずや途中に於て怪しき者と認められ上方勢に取り押へられ書面

を引き上げられなば夫の大事吾身の大事といつて落城の注心致さな

ければ夫の進退に拘はる事故如何致して是を知らせやうやと御工風

の末例の御利發の八重子殿故落城の義を精しくお認めになり其間を

透して置いて細かに一條くと裁ち切り是を一二三の順序を附け小線

にして笠の紐となして是を被せ御城中から家來を一人野州小山へ差



し遣はされまされたが姿が變つておいでなさる故別に怪みしもせず誰一人咎める者もないから山内の家來は晝夜の厭いなく道を急いで小山へ罷り越し主人に對面をして奥方の口上を述べ右の笠の紐を取て差上りました夫より一二三の順を立て見ると落城の事から大坂に兵を揚げたる次第から残らず書いてムいます且つ私しの身の上は次第によりては自殺を致しまするに因り必ず徳川家にお味方なされいでお迷ひ成さらぬ様にと細々と認めましてムひました實に婦人の鏡とも謂つべきは此の八重子でムいます

孝子佐野山

茲に寛政の頃谷風梶之助と云ふ力士がムいました、生れは奥州白石在の霞根村初めの名を秀の山雷五郎、中度は伊達が崎森右衛門、末に至つて谷風梶之助と稱へました、

谷風前に谷風無し、後に谷風無しと云ひ、今以ちまして谷風と云ふ力士はムいません、容貌さながら白象の眠りしが如く眼の細い色の白いテツプリと肥つて強い強くないのと云つて雲州の雷電と云ふ人は肩巾三尺桶胴一枚肋で重量四十二貫目と云ふ大力士でムいまし



たが、谷風にはかりは勝てんと云つた程、

扱てまた此の谷風は誠に情け深い人で門に立ちまする非人に鳥目を遣り、或は朝早く握り飯を造らへて置いて大きなのを一人に一つ宛ません、酒は飲まず、煙草は嫌い、勝負事はしたことはなく、婦人も嫌い、只々物を施すのが此の人の道樂、實に物を施すと云ふ道樂は宜いことで、されば力士一統が神の如くに尊敬いたし誰一人として谷風の前に出て戯談口一つ聞た事は無いと云ふ、自分で見識を取る様な人でも無いまんが、自づから人が谷風關、谷風關と云つ

て實に子が親を慕うが如くであります、人間は斯くありたき事でもありません、

こゝに谷風梶之助の誕生日の祝ひで酒は新川新堀より劍菱、男山その外の酒をドン／＼樽で積み込み、魚は新場小田原町の親方出合より進物と云つて鯛や鰯を山の如くに積み、臺所から住居へ附いて張出しを致し料理人が十人程參つて料理を致す、どうも客人が大變でムいまして力士仲間は残らず呼びましたから、彼處に十人此處に二十人寄り合は酒を飲み、甚句を唄ひ手を叩きワイ／＼と云つて騒いで居る、夫れを見ながら梶之助は宜い心持にニコ／＼と笑いな



がら彼方此方を見渡し

梶「夫れ此處へ肴を持って來い、彼處へ酒を持って行け、團子山ナゼ燗をドン／＼しないサア酒の嫌いな者は飯を食ふが宜いぞ。」

と聲を掛る度毎に角力取一同手を突て

カ「親方有り難うござります。」

と挨拶をするから

梶「さう一々改たまつて挨拶をしないでも宜い、さう固くして居る

と酒も何も旨くない遠慮なくドン／＼呑み食いをして呉れ。」

カ「有り難う存じます。」

と禮を述ぶる、然るに今臺所際の所で五六名の取り的が揃つてガ

ヤ／＼咄しをしながら酒を飲んで居る中に一人時々佐野山、佐野山

と云ふ事を申ますから廊下を歩行きながら、谷風が聞いてハテ何で

佐野山と云ふかしら、と足を止めて嘯を聞きますると

△今俺が新錢座の仙臺様の御屋敷へ往て御角力掛りへ今日の親方

さんの祝ひの事に申して魚を持って往た歸りに汐止の川端を多勢人が

立てガヤ／＼と往て居るから身投げでもあつたのかと思つて其處へ

往て覗いて見たらさうではない、あの佐野山庄兵衛が頭から泥水を

浴びて拜んで居るだ、何で拜んでるのかと立て居る人に聞いたら、



此の先の裏に世帯をもつて居て兩親に江戸を見せたいと云つて態々國から連れて來た三日目から兩親共に病らい出し碌に取れない角力だから元々金はなし薬の代にも盡きて自分は素裸體になり親父さんに薬を飲ませて水ぶりを取て病氣の癒るやうにと拜んで居るのだがナント親孝行の角方ぢやないかと云い、夫れに又餘まり不潔い服装をして不潔い家に住んで居るから誰も唯佐野山と云ふ者はない、貧乏佐野山乞食佐野山と悪くいふ者もあつたが初めの中は道樂でもして貧乏をするのかと思つて居たらどうして恐ろしい親孝行で折角兩親に江戸を見せたいと連れて來た三日目から病ひにつくとは情けな

い自分も毎日寒氣を犯して水ぶりを取り、自分は飯は食はないで兩親に湯なり粥なりすはして看病して居るは實に感心な者だと話して居たが、何と佐野山も奥州の生れ家の親方も奥州だが同じ國に生れても斯うも運の善い人と悪い人があるものか。」と云ふ話を谷風がチラリと聞いて

梶「丸太山く。」

丸「へエ。」

梶「茲へ來い。」

△「夫れ丸太山詰らねへ事を喋舌りやアがつて佐野山も家の親方さ



んも同じ奥州の成長ちでどうの斯うのと云つたので親方さんが怒つたのだから張り殺されてしまふぞ。」

丸「そりやア大變だ、吾れ逃げべエか。」

△「逃げべエか」と云つたつて逃げて見ろ俺等が張り殺さてれ仕舞うから貴様を逃がす譯には往ねへ。」

丸「そりやア大變だ、止せば宜かつた詰らねへ事を云つて口は災いの門、舌は災いの根と云ふが違エねへ張り殺される積りで親方さんの前へ往て誤まつて見やう是と云ふも貧乏神佐野山のお蔭だ……へエ親方さん何でムいますか。」

梶「丸太山今汝が話をして居たのを俺は聞いたぞ。」

丸「へエ……悪い了簡で言たのぢやアムいません、實は御酒を一杯戴だきましたに由て吾を忘れて佐野山關の事をば貧乏神の乞食のと云いました私しが言つたのではムいません世間の人がいふのを聞いて來たので今日は親方さんの御誕生日だと云ふに貧乏だの乞食だのと云つたのが貴君のお氣に障つたか知りませんがどうぞ御免なすつて下さい、張るなればソーツとお願ひ申します、貴君の力一杯に張られれば俺しやア死んで仕舞いますから。」

梶「何をグズグズ言つてる貴様を呼び出したのは頭を張ると云ふ譯



ではない。」

丸「ア、それでムいますか夫はマア有り難い團子山の野郎俺を嚇か  
しやアがつてえらう膽を潰した、何でムいます。」

梶「是から仙臺様のお屋敷へ一寸用があつて行から汝供をして行  
け。」

丸「どこへでも親方さんのお供をして行きます。」

梶「爲右衛門く。」

と雷電を呼びましたから

爲「へエ。」

梶「俺の名代に皆様を宜う馳走して呉れ鬼面山く。」

梶「爲右衛門と貴様と皆様を取り持て呉れ一寸用が出来たから仙臺  
のお屋敷まで往てくる。」

と鬼の様な大力士も谷風には頭が上りません  
鬼「へエ宜しうムいます、往てお出でなさい。」

と夫から谷風梶之助は丸太山と云ふ取方を供に連れて芝新錢座の仙  
臺様のお屋敷へ参り御角力掛りに對面をして

梶「恐れながらお願いがムります。」



○ア、谷風關今日はお前の誕生日だとして態々魚をば弟子に持たして遣して呉れたが何うも有り難う今皆んなで食べて居る處らだ。」

梶「就まして旦那様に御願えがムりますどうぞお金を五十兩私しに拜借を仰せ付けられて下さらば千萬ありがたう存じます。」

○「何だとエ五十兩ハ、アお前は物堅いによつて上から致して下さる物を容易には受けもせず、ねだり事と云ふものは仕た事もなく外の關取は種々の事をいつてくるが、關取許りは是までツイぞ云つて来た事はない、して五十兩で宜いのかへ、お前の事なら百兩でも二百兩でも三百兩でも、夷子講の賣り買見たやうだが千兩でも直ぐに

手當をしてやれと必ずお上は仰しやる。」

梶「エ、其の金と云ふは私しが遣ふのではムいません、少々恵んでやるものがムいますので生憎自分の手許にムいません故此方へ願ひに出ました譯。」

○「ウム關取實にお前は感心だ中々夫は出来ない事だデハマア五十兩持て行つしやい。」

と御角力掛りは直ぐに貸して呉れましたから梶之助は右の金を受取て歸り掛に木挽町五丁目の足袋屋の裏で突き當りの左の角の家が佐野山の家でムいますと近所の者が教へて呉れましたゆる路次へノソ



「這入て行くと近所の者は日の下開山の谷風關ぢやアねへか宜い  
關取だナア彼の乞食佐野山の家へ行んだせ彼んな汚なへ家へ往んだ  
せ彼んな汚ねへ家へ何の用があるかしらねへが宜くマア關取が行な  
ア、と見て居る中に其の乞食と名を取た佐野山の門口をガラリツと  
開け

梶「佐野山家に居るか。」

「フツと見ると日の下開山の谷風關だから佐野山に於ては十一月と云  
ふのに襦袢一つで薬十瓶の掛つた七りんの下をあほいで居りました  
が是を見て驚ろき襦袢を引張て見たが長くもないから延びもしない

クルクル廻つて居るから

梶「コレコレ佐野山汝が襦袢を着て居やうと裸體で居やうと俺はけ  
して構はん俺は貴様の宅に頼みがあつて來たに由てどうか俺の頼み  
を聞いて呉れ。」

佐「親方さん何でムいますか斯んな乞食小屋へ御自身でお尋ね下さ  
らずとも御用がムいますればお家の者に佐野山にチヨイと來いと仰  
しやれば直ぐに親方さんのお宅へ参りますものを態々お越しになり  
ましては恐れ入りましたムいます。」

梶「イヤ外ではないが一寸鹽を一升買て來て呉れ。」



佐「へエ貴君鹽を一升買て私しの頭へでも付けて嚙るのですか。」  
 梶「馬鹿をいへ汝のやうなものを嚙つても旨かアねへなんでも宜い  
 から鹽を一升買て來て呉れ。」

佐野山に於ては繻伴一つでクル／＼廻つて居りますから丸太山と云  
 ふ者が氣の毒に思つて

丸「佐野山關私しが買て來るからお盆を出して下され。」

佐「ナアニ俺しが買て來ます。」

丸「ナアニ雜作もねへ私しが買て來て上げやう。」

とお盆を受取て丸太山は鹽を一升買て來ました、何うするかと思ふ

と丸太山に持たして來たる横綱の化粧廻しを取り出だし素裸體にな  
 つて土俵入りのやうにスツかり支度をいたし刀をば弟子の丸太山と  
 佐野山に持たせ佐野山も貧乏ながら角力取りだから廻しは持て居り  
 ます、其處で谷風は庄兵衛の兩親が寢て居る枕元に往て

梶「是は初めてお目に懸ります佐野山の御兩親でムいますか、私し  
 は奥州白石在霞根村の生れであります、先の宮城野關の取りたて  
 ムいまして今では谷風梶之助と云い何不自由もない身の上今日は私  
 の誕生日の祝い仲間の力士を集め酒盛をして佐野山にも來るやうに  
 といつて使を出しましたが一向に參りません何で佐野山が來ないか



と思つて居ましたら御兩親が御病氣だによつて少しも傍を離れず看病をして居るとの事、夫れ故私しがお尋ね申し御兩親の寢て居る傍で土俵入りをする所ろを御覽に入れて延喜直しに此の家を福の神の住居にして進せやうと思ふのでムいますから私しが土俵入の眞似をするのを御太儀でもありませうが、どうぞ御覽なすつて下さい。」

佐野山の兩親は涙を流して  
兩「エ、勿體ないお關取が乞食小屋の様なる所ろへお出で成され結構な化粧廻しで土俵入りをしてお見せ下さるとはありがたいとも何とも申さうやうもムいません。」

と兩人の喜こび大方ならず

梶「けれども強くしこを踏めば根太板を踏み折てしまうから。」

と盆に盛たる鹽を門口へ蒔て其の上に二十五兩包みを二つ載せ

梶「扱是は少ないが私しのホンの志しお薬を飲み旨い物を食べなされて身體を癒し、さうして國へ歸らしやるとも當所へ留まらしやるとも若し江戸に留まつて居なさるなら萬事お前さん方の賄いを私しがして進せやう私しは幼さい中に兩親に死なれ孝行をしたい時分に親はなしと云ふ譬への通り親孝行と云ふことをしたくも是迄出來なかつたが私しも奥州、お前さんも奥州、同なじ國から生れ出で佐野



山は孝行だけれども貧乏神疫病神など、人に言はれて實に可愛想だ  
によつて今日より福の神佐野山と名前を改らためさすゆへ御兩親御  
安心成されまし。」

佐野山は大地へ手を突き聲を揚げワツとばかりに泣き出した故

梶「是れ佐野山泣く奴があるものか貧乏神が改たまつて今日よりは  
福の神だ是からけして乞食佐野山貧乏神の疫病神のと人に云はれぬ  
やう俺が骨を折て御兩親にも安心をさする故能孝行をさつしやれ。」  
と五十兩の金を渡して歸りました、茲で早速疊を入れ米を買ひ借り  
は返へし自分の身には付すとも兩親には旨い物を食はし醫者にも掛

け厚く手當をいたし又毎日、谷風から兩親の處ろへ種々の物を持  
たして遣こしますから今は其日の不自由もなく身體も追々快方に向  
むいて参りました是れ孝行の徳でムいます、されば佐野山は孝行の  
爲めに貧乏が福となり其喜こび大方ならず、時に寛政三年の春角力  
回向院の境内に於て興行の時に年寄一統へ谷風の頼みに  
梶「さて私しが一生涯の頼みだが何と聞て下されぬか。」

年「へエ、エーお頼みとは。」

梶「頼みと云ふは外の事ではないがどうか十日の中に假令初日でも  
二日目でも十日目でも佐野山庄兵衛と私しとの顔を合せて下され佐



野山庄兵衛とたつた一度で宜いから顔を合せて貰いたい。」

佐「夫は關取不可ませぬ日頃のお心にも似合はん無理の一言。」

梶「なせ。」

年「何故と言つたつて物には法のある物まだ十兩になつたばかりの佐野山か日の下開山の大關と顔が合せられる者ではないそんな飛び違つた角力を取る節になると角力の法が猥れるからどうか夫は御勘辨を願います。」

梶「夫だから私しが生涯の頼みだと云つたぢやアないか私しは佐野山と十日の中に一度顔を合せる事が出来なければモ一今日限り私し

は角力を取りませぬ又た家中の者にも取らせない又兄弟分残らず角力を止めさず、夫でなければ別に谷風一手の角力を作る奥州へ往て奥州の角力取りになつても江戸へは一生構いません。」

年「さう關取怒ちやア不可ませぬ。」

梶「そんなら俺の頼みを聞いて下さるか。」

と強ての頼みに仕方なく

年「左様ならば。」

と年寄が谷風關の事だから言ふ事を聞く方が宜からうと第二日目谷風梶之助と佐野山庄兵衛と顔が合うと云ふと忽ち、是が市中の評



判となつて

○「どうだ乞食佐野山と谷風と二日目に顔が合ふと云ふが佐野山と云ふ奴はヨク」と貧乏神だ、谷風關の爲めに殺されて仕舞ほ併し可愛想な者だなア俺は二日目に櫛の花を持って行う。」

△「俺は線香を持って往てやらう。」

とワイ／＼と云ふ評判愈々其の當日になり番敷を盡して谷風と佐野山が土俵に上がりしこをふむ時左右の見物が

甲「乞食佐野山、貧乏佐野山負けるな。」

と云ふ中には

乙「佐野山殺されるぞ覺悟をしろ。」

と種々なことを云はれる時に谷風は左右をキツト見て

梶「是れ／＼棧敷の見物が貧乏神乞食など、佐野山の事を云ふが何で乞食か貧乏神か往て聞て來い角力取りには貧乏神はない乞食はない客人だからと言つて容赦はない。」

と云いましたから相手が關取でありますから見物も驚るいて

見物「ソラ見ねへだから下らねへことを云ふなと云ふンだ谷風に怒られたら踏み殺されて仕舞うぞと流石ガヤ／＼と致した場中谷風の一言にシーインとして仕舞つた時に谷風は大音上げ



梶「今日よりは佐野山庄兵衛は福の神と名前を改めた故以來福の神佐野山と云はつしやれ……庄兵衛立たんか〜。」

佐「立てません。」

梶「是れ何を泣いてる。」

佐「エ、親方さん濟みませんがどうぞ角力を取るのは堪忍して下さい。」

梶「馬鹿をいへ恩は恩、角力は角力俺を投げ殺す氣で来い。」

と立ち上つて佐野山の手を取て

梶「サア来い。」

と云い乍ら谷風がグル〜土俵の上を飛び刎て居るが何の事はない人形見たやうな取扱い、見物はアツと許りに憫れて見て居ります、中に廻るはづみに谷風が土俵から下へ轉がり落ちた

佐「エ、親方さんお怪我を成さりは致しませんか。」

と佐野山が飛び下りて身體を擦りました

梶「是れ〜何をする何故手を上げぬ。」

佐「夫でもどうも……。」

梶「エ、まだ泣いてるか早く手を上げる。」

と云はれて佐野山も據ころなく土俵に上つて手を上ると見物が



見物「佐野山勝たぞ日本一の谷風に勝たから成る程福の神だ。」

と夫より佐野山を指して貧乏神、乞食佐野山などと言ふものは一人もないやうに成りました、是れ谷風が生涯の七善事と云つて七善事を施こしました一つ、佐野山庄兵衛に二度まで負けてやり

「どうぞ彼れは永く角力を取らしてやつて下され、俺は年寄には成らんから彼を年寄にして呉れる。」

との頼みに寄つて佐野山は後に二十山と改名いたし兩親を見送り谷風の死に水をも取たと云ふ孝子佐野山の傳記は是でムいます

### 長篠の水潜り

天正三年五月一日より三州長篠の城に立籠りしは奥平九八郎定政加勢として松平彌五郎景忠總勢三千餘人然るところ武田伊奈四郎勝頼邊に三萬の兵を増して長篠の城を十重二十重に取り巻き十一日の間だ新手を入れ替へ入れ替へ只一擧に攻め落さんとなす、其の勢破竹の如く奥平定政、松平彌五郎景忠八方に下知をして籠城なせしところ、邊かの籠城にて兵糧の手當充分ならざる故最早兩三日程の手當より外にムらんから松平定政は重立たる者を集め兵糧盡きて討



死するは武門の耻辱さるに由て明日朝掛に武田の大軍へ切て入り花々しく討死なさん、而々其の用意致されよ此の時彌五郎景忠席を進み出で

景定政殿の御一言通れ勇士の覺悟は斯くありたけれを死を急ぐは實智者の爲す所に非ず、遠州濱松に援兵を乞いなば徳川家より速やかに援兵を差出すに相違ない、併し嚴重の圍みゆへ濱松へ往て注進する事容易ならず第一岩代川の水量増り水底を潜らざれば敵の圍みを越ゆる事能はず誰かある岩代の水底を潜つて濱松へ使を致する者はあらざるかと申したる此の時定政の家老奥平治右衛門と呼び出し

定其の方は水練に妙を待て屢々水中にて功を致する事は聞き及べり今岩代の水底を潜り濱松へ使をする者は其の方より外にはない、急ぎ支度を致せよ。」

と申されたる時治右衛門は

治君の仰せには候へども御父美作守定能公よりの仰せに忤定政は若年に致して血氣に疾る故汝少しも傍を離れては相成らずと仰せ渡されてムります、故君の御先途を見届けざる中は何の様な御使にても御免を蒙ります、併し私しの組下の者へ残らず水練を教へ置きましてムります、依て組の者をお呼び出しの上仰せ付けられて然る



べく。」

と述べられました、定政は甚だ御不興の體にて何の言葉もなき折かに傍へより彌五郎景忠

景「治右衛門の云はるゝ處ろ尤もなり組下の者に水練を教へ置いたとの事なれば夫を呼び出だしてお尋ねあつて然るべし。」

と夫より治右衛門の組下の者多勢夫へ呼び出して岩代の水底を潜つて遠州濱松へ使を致せる者は莫大もない褒美を取らする籠城の兵士

三千人の生命に拘はる大事の使を仕遂ぐる者はあらざるかと云ふと此時一人席を進み出で

○「身不肖には候へども私しは城の水底を潜り遠州濱松へ御使を仕つるでござりまする。」

と云ふのを人々見てあれば當國の住人鳥居強右衛門勝忠なり年齢三十四五筋骨逞しく一個の豪傑此の時に九八郎定政

定「強右衛門とやら如何して水底を潜るや其の方の心得を申されよ。」

勝「さん候岩代川の水底を潜りますには川上より乗切て眼望峠へ登り山越にて遠州濱松へ罷り越すより外に善き法は無いません。」

定「ウム吾が思ふ所と相同じ之れを其方に取りらするぞ。」



と傍へにありし奥平名代の名劔面影と銘の切ある貞宗の一刀之れを  
強右衛門勝忠に下さる、是れは三千人の兵士を助くるも殺すも此の  
密使を心得て使を仕遂ぐるものにある故斯く大切のお刀を下さいま  
したのでムいます、強右衛門は充分に支度を致し立ち出でんとする  
時再び御前に召されて

定「強右衛門是は獺の皮を以て製らへたる袋にして少しも水の透ら  
んもの殊に括蓋も嚴重に出来て居る故又首尾能く岩代川を潜り出で  
たる其の時に何を以て城中へ知らするや。」

勝「眼未峠の頂上に煙を揚げまする又援兵の儀御承知有之節は再び

山へ取て返し徳川家のみの御加勢なれば一煙り織田家も御同道なれ  
ば今一煙り又其の煙りを揚げたる後ち續いて鐵砲を放ち其彈一つ聞  
へなば一萬人二つなれば二萬人三つなれば三萬人と御承知下され。」

定「ウム適れなり。」

勝「然らば。」

と云つて御前を退ぞき立たんとする時に  
定待て勝忠未だ其方に遣はすものがある是は當家の寶にしてちば  
りの香と云ふ是は一大事を認める紙に残らず此の香が敷き込んであ  
る父上の手許にも吾が手許にもある容易ならざる香なれ共實は今日



は死を決して此の大役を勤める故汝に之れを取らするに由て萬事に心を配り寸志なき様に謀らい濱松へ使を致せ。」

と懇ろに仰せ聞けられましたから強右衛門君恩を謝し御前を退ぞき直ちに岩代川の川上にかゝり時しも雨が烈しく降り居りまして夜分の事故河端まで進み入り敵地を遙かに見渡せば白地に黒の大山道段々の旗十六葉の枝菊の馬印床几に懸つて控へしは是れ武田の四天王の一人馬場美濃守信房なり強右衛門天を仰いで嘆息なし

勝「ア、今宵の固めは武田の勇士馬場美濃守信房と相見へる餘人なれば首尾能う水を潜り遠州へ罷り越すに難き事はなけれど信房にて

は逆も覺束ない、併し是迄罷り越したる故せめて様子を試して見やうと水面を見ると大綱小綱を掛け渡し所々に鳴子が附いて居ります故中々潜る處るではムいません、遙かに敵の様子を見て朽木を持ち來り泳いで往て鳴子に掛け繩を引くとガラガラツと鳴子になる

○「夫れ何か曲者が鳴子に掛つた。」

と用意の番船に飛び乗て番兵來つて檢めるとイヤ大きな木の根が掛つて居た

○「是がく。」

と大將の處ろへ持て參り



○「只今鳴子に掛りしは此の木の根でございます。」

太「ア、然うか是で分つた併し油断は成らん最早落城も兩三日であるから嚴重に心を配つて固めなければならん。」

と夫々油断なく罷りありまする中に、又程過て草の根子を能く水で洗つて鳴子の綱へ掛けて置いてガラガラツと引いた

○「夫れ又何者か掛りし。」

と舟を乗出し大勢往て檢べて見ると今度は草の大きな株が引掛けて居ました

○「ア、此出水で川上から種々な物が流れて來る殊に此川には大き

な鱒が居て掛る事が折々ある併し、大將の仰せ故少しも油断は相成らん。」

と嚴重に備へ立て居りますから、強右衛門是では迎も水底を潜る事は出来ません又元の處へ歸つて敵陣の様子を窺うと、其中に宵番と

明番と交代になりましたして明番は跡部大炊の介で悉皆幕も旗も替りました、是れ幸いななり跡部なれば大丈夫美事水底に潜つて遠州へ罷り

越せる未だ奥平の運の末には至らずと打喜こんで様子を窺う中に雨は益々強く雷鳴烈しくなりしかば跡部と云ふ人は至つて臆病な人な

れども勝頼公の大のお氣に入り武田の家は跡部と長坂の爲に亡びて



居ります、雷が烈しうございます故雷嫌ひの跡部は陣小屋の中に密  
んで居ると大將が斯の如くなれば家來共も皆陣小屋の中へ引込んで  
グツスリと寐込んで仕舞いました此方は強右衛門勝忠雷雨の烈しき  
を幸いに遂々水を潜り抜けましたが誰咎める者もありませんから漸  
くにして跡部の陣前を抜け出で眼望峠へ掛りました此方は奥平主従  
積櫓に登り望眼峠の方をキツト見て居ると烟ノンノと立ち上る扱  
は強右衛門美ん事水中を潜り抜けたものと相見へると一同喜こび居  
ります、扱強右衛門は遠州濱松へ罷り越し徳川家康公に對面なし御  
援兵の儀を申入れる其時奥平美作守定能公も忤九八郎よりの使なれ

ば同道致して御前へ出でました、家康公は悉ごとく強右衛門の誠忠  
を感じ

家「早速援兵に及ぶ併し其の方は最早城中へ歸へるに及ばんから當  
城に止まれよ。」

といふ所へ織田信長公が着でムるとの知らせ

家「是は、信長殿お出でとある故暫らく夫に待て居れ。」

と仰しやつたから強右衛門は休息して居る中に信長公はお乗込に相  
成りお供の方は追々跡より着陣早速家康公へ御對面、扱て長篠にて  
援兵の儀を申込み來る事をお話になると固より猛勇の信長公早速兵



を差向くるが宜からんとのお言葉

家「夫はどうも大悦仕つります然らば強右衛門直ぐに御出兵の御用意あるとの事左様相心得ろ。」

勝「夫に就て私し眼望峠の頂上へ御援兵の儀を煙を以て城中へ知らせなければ成りません、よつて此儘御免蒙ります。」

家「其儀は尤も千萬併し煙を上げたならば直ぐに引返せ。」

勝「委細承知仕りました。」

と強右衛門は引返して眼望峠の頂上にあがる、此方は奥平主従只煙りの揚る揚らんによつて生死を決しなければならん事故替るゝ積み

櫓へ登つて眼望峠の方を目も放さず見て居ります、然るに誠に奥平家の御高連其の日は雨も風もなく空に一點の雲もなく誠に穩なる天氣、時に五月十五日の九ツ眼望峠の頂きにノンくと二煙り、扱は織田信長御兩家共に御援兵と相見へる城中一々大喜こび筒音が聞へしによつて岩代の川上に往て眼望峠の方にて様子を聞くと家來の者は岩代の川上へ参り様子如何にと待つ中にボンボン々々々々々五ツの筒音されば五萬人と喜んで城中へ立ち歸り此段大將定政へ申上ると城中一同の主従が勇氣凜々として相待たり、強右衛門は鐵砲を打て援兵を知らせ眼望峠の麓より致して城中へ歸らうか濱松へ



歸らうかと少しく思案をして居る處ろへ土屋右衛門尉が五十人の手勢を連れて夫へ参り怪しき筒音の聞へし故夫を調べに参つたのを強右衛門は早くも見て逃げ出ださんと致しましたが迎も逃げても逃げ終せんと思ひましたから大膽にも引返して参つて兩手を突き

勝「是はお役目御苦勞千萬に存じます。」

士「シテ其方は何者だ。」

勝「穴山殿の身内でムいます。」(穴山殿と云ふのは穴山雲齋殿の事)

士「何用あつて今頃此處へ來た。」

勝「左様でムいます長陣の退屈で何をがな獲物があらうと探して居

ります。」

士「ア、左様か穴山殿の身内とあらば合言葉を存じて居るだらう合

言葉を申せ。」

と言はれてハツト息詰つたから

士「夫れ怪しき奴繩打て。」

と云つて夫よりハツト答へて土屋の兵士が飛び掛るから持て居た鐵砲を初めの内は振り廻して居りましたが切り棄てると聲を掛ると各自に刀を引抜切り掛るから仕方がない一刀を抜いて兩三名夫り切へ殺しました。此時土屋の手に従つて忍び廻りに参られた河原彌太郎



と申す人がこぞいます、此の人は其頃三彌太郎と申して今川にて朝比奈彌太郎武田に於て河原彌太郎、上杉にて鬼小島彌太郎と云ふ其一人でこぞいます、其人が之れ必ずや敵の間者に相違ないと槍の石突を以て遂々其處へ強右衛門の一刀を叩き落とし忽ち繩を掛まして直様勝頼公の陣中へ引いて参りました、勝頼公御覽遊ばされて

勝「其方は奥平の家來か徳川の家來か何用あつて此の近邊を徘徊に及ばれしぞ。」

強右衛門は恐るゝ氣色もなく首を上げ

「私しは長篠の城主奥平九八郎定政の家來鳥居強右衛門と申する

者でこぞいます、岩代の水底を潜り遠州濱松へ罷り越し援兵の儀を申し處折柄織田信長公御來陣早速五萬の大軍を此地へ出兵成すとの事僅か三千の奥平の小勢により勝を得ざる武田家なれば前後より挾討たれなば只一戦に敗るゝこと疑いなし勝頼公には首を洗つて御待なされよ。」

と大音に呼はつたり、其豪膽に流石武田の武田の兵もアツといつて一同顔を見合せました、固より死を決したる勝忠なれば群がる者をば藁で作し人形の如くに心得居ります、勝頼は怒れるかと思ひの外莞爾笑い



「ア、其方が豪膽實に奥平には善い家來を持たれた是強右衛門とやら汝をば今勝頼が手に掛た、扱茲で生れ變つて此の勝頼に仕へてはどうだ、篤く用ひるが武田の人にはならんか。」

強右衛門心中に思へらく勝頼の一言は吾をば家來にせんと云ふ何か巧があると見へるが少しも刻限を延さんければ織田徳川の兩旗が後ろへ廻るを知りたる上は武田三萬の兵士俄かに長篠城を押取巻き火水になれと攻め立ては塀も破れ石垣も崩れ居る處ゆへ籠城は逆も覺束なし寸刻にても偽はつて刻限を延ばすに如かずと心得たる故強「されば仰せの通り是にて最早私しの奉公も相濟みました然る處

る無禮の一言御咎めもなく却て家來に致さるゝとの御言葉有難さ仕合せに存じ奉つる仰せに隨ひ只今より改めて武田の人となり犬馬の勞を盡すでムらう。」

勝「能うこそ申された、扱て家來の中に奥平美作守の書面を所持して居る者はないか。」

奥平と云ふ人は武田家に暫らく足を止めて居て夫が遽かに徳川家に従つた故其怒り烈しく因て兵を差向けられたのでございますが、此の美作守は實に美筆である故家中の者で所持して居る者があるかと仰しやられた馬場美濃守が



馬「私しが其手紙を持って居ります。」

勝「夫れ幸い是へ。」

と取り出ださせると古今の美筆

勝「誰かある此の偽筆をする者はないか三萬の兵士の中でござるか

ら夫から夫へと御沙汰があると長坂長範と云ふ人は偽筆の名人

長「私しが認めるでござりませう。」

勝「是はどうも幸いのことである然らば早速是を認めて貰ひたい。」

長「心得ましてございます。」

と筆を取て

一鳥居強右衛門同道にて遠州濱松城へ罷り出で家康公に御目通り

を致し御加勢の儀を申出し候ところ遽かに自國に亂を發し援

兵の儀相叶いがたしとの御沙汰是によつて早々開城あるべき事

天正三年五月十五日

美 作 守

九 八 郎 へ

勝「扱て強右衛門其方も一書を認める。」

唄「へい。」

一遠州濱松へ着し御父美作守様を願ひ御同道の上濱松城へ罷り越

し徳川家康公へお目通りを致し御加勢の儀を乞ひ候處自國に大



亂を發し中々城を棄て援兵の儀覺束なく御斷はりに候故御開城成されて然るべくと御父上様よりの御斷はりに御座候

鳥居強右衛門

奥平九八郎様へ

勝「コレ是を矢文にして長篠の城中へ射込め。」

兵「心得ましてございます。」

と夫より屈竟の者を撰んで長篠の城中へ射込みました城中にては織田徳川の兩家にて五萬の援兵有之と知り遠からず武田の大軍を打破つて呉れんと喜び居る處るへ矢文が參つた其の矢を開いて見ると

右の次第でござるから盡く驚いて

定「ハテどうも合點の往かぬ事だ全く強右衛門の手跡父上の御書面に相違ない、煙の揚つたるのと筒音の聞へたる跡で此の書面の來ると云ふは實に分からんと一同の者も寂として更に言葉もなし、此の時大口を開いて家老奥平治右衛門

治「アハ、ハ、ハ、ハ。」

と笑つた定政勃然として

定「何を貴様は高笑ひをする。」

治「左様でゝいます貴君が茲にお氣の付かないのが可笑いから笑ひ



ました。」

定「何を。」

「何を」といつて此の手紙を私しが何邊あぶつても香いが致しませ  
ん、御當家には大切なる御書をお認め遊ばす紙にはちばりの香が引  
き込んでいますゆへ火にかざしますと其香い馥郁と致します、然  
るに今此の紙は何度あぶつて嗅いで見ても匂いが致しません、夫は  
彼も存じて居ります事で當城を立ち出づる時に上から強右衛門へ仰  
せ聞けられたでは：「いませんか察する處ろ大砲を放して援兵を知ら  
せ過まつて敵の擒になりしに相違ふいません、強右衛門はちばりの

香の引き込んだる紙の事を存じて居る故如何なる事を認めて城中へ  
射込んでも更に信じないと云ふ事を察し夫で己も書いて其の通り送  
られました事と存じます、ア、不憫なるは強右衛門でございます、  
忠臣強右衛門は敵の爲に今日命を落す、併し適れな名士君は櫓へ上  
つて武田家へ向い罵しり玉ふて然るべく。」  
と申述べましたから、九八郎大いに喜び速やかに櫓に上り大音上  
げて

定「武田の兵士にももの申さん夫へ近く進まれよ。」

と呼はつたり我もくと武田の兵士九八郎定政何を云ふかと耳聳だ



つて聞いて居ると

定「只今城中へ矢文を射込むと雖ども斯く淺間しき計畧にて開城致する様な九八郎にあらず笑ふに絶えたる武田の兵士アハ、ハ、ハ。」  
と異口同音に大口開いて笑ひたり勝頼大いに怒り強右衛門を呼び出して汝堀端近く進み出で援兵の儀叶はんから開城致して然るべしと呼はられ

強「心得ましてござります。」

勝「是れ強右衛門を引立て參れ。」

兵「心得ました。」

と數多の兵士強右衛門を引立て堀端へ參り前後から大勢取り巻いて居ります時に強右衛門大音を上げ

強「城中の者に物申さん。」

と強右衛門の姿を見て扱は敵の擒になりしかと思はず涙をホロリと流し併し彼何をいふかと耳聳だて、承まはるに此の時強右衛門大音揚げ

強「織田徳川の二方にて五萬人の御援兵直ぐに武田の後ろに向い、御出兵有之との事此段御承知相成りたし。」

と呼はつたりアツと云つて武田の兵が強右衛門の口へ手を當がつた



が既間に合はん大將の御前へ引立て來ると勝頼烈火の如くに怒り強  
右衛門を磔臺に括し付け敵陣の正面へ磔臺を押立て左右から突き  
立ると烈しき下知強右衛門動ずる氣色もなく

強「臨終の一言相待た。」

我君の命に代はる玉の緒の

何を厭はん武士の道

と辭世を詠じて茲に一命を落し今三州の市田村に一寺建立なし勝忠  
寺と稱へました、其境内に嗚呼忠臣鳥居勝忠之墓と云ふが亙います  
然るに此の時武田の勢が大敗軍遂に天目山に亡びまして亙います、

ね ぎ ま

寛政の頃國主大名の中で三御隠居と稱する御方が亙いました、雲  
州の大守不迷公備前の大主一心公有馬の雲齋公此の御三方を三御隠  
居と申ました、爰に備前岡山の大守松平内藏頭様が御改革の時に遠  
かに御隠居遊ばされ一心公と申上りました、何故遽かに御隠居遊ばさ  
れしかと申すに松平攝津守殿が御改革仰せ出だされの節儉約は固よ  
り爲すべき事なれ共上々に立つ者がさう儉約節儉と申して物を詰め  
る其時には市中の町人共が暮しに差支へる、夫故其の頃の落首に



白河の澄める水には住悪し濁れる元の田沼戀しい

と云ふが何よりの證據でムいます、雲州の太守も同時に御隠居を成されしが是も矢張其の議論の合はざる所からでムいませう、然る處ろ右のお二方は誠に仲がよく出羽様が備前様へ入らせらるゝかと思ふと備前様が雲州公へお出になり御酒徳利と云はれる迄お仲がよく何處へ行くにも兩卿が打連立してお出掛になります、或る雪の降る日に朝早く雲州公は備前公の大名小路の御屋敷へお出でになりました  
雲「イヤ今日は雪見に參らうではムらんか。」  
備「夫は宜しい手前も實は尊公をお誘ひ申上やうと存じ支度を致し

て居つた處ろ友あり遠方より來る又樂しからずやと申して御遠方の處を態々お越しは恐れ入りました、早々支度を致して御同道仕つりませう。」

雲「そこで今日は駕籠を止して馬で參るは如何で。」

備「夫は宜しい隠居とは申ながら吾々共未だ壯年血氣の若者にも劣らざる積り雪は駕籠等では興が薄いから馬が宜しうござらう。」  
と夫より家來を兩三名連れて残らず馬上にてお乗出しになる、厩仲間には溢すまい事か

○「雪見も宜いけれ共何處迄往らつしやるか知れない卒去らば雪見



に轉ぶ處ろまでと云ふが轉ぶ處まで遣られては何處まで行くか知れ  
なす。」

△「伊勢溢すなく何方もお華な御隠居様だ御酒は充分下さるし寒  
からうと云ふのでマアお手當が出らア夫を樂しみに往けく。」  
と大名小路のお屋敷をお乗り出しに相成りまして第一番に不忍雪を  
御覽遊ばされましたが實に此の處ろは絶景でございます只今では馬  
駈場になつて居りますが、昔は如何にも雅致がございました彼處  
を水鶏の里と申ました、右に上野を見左りに本郷の高臺を見まして  
左右に積る雪景色實に言語に述べ難き彼處を指して小西湖と稱へま

する、是より隅田川へ居らせられて雪を御覽遊ばされやうと云ふの  
で隅田の方へシトくお乗り出しに相成りましたが丁度袴腰と云ふ  
處がございます、是は黒門より左右に土手がございまして夫で石垣  
が袴腰になつて居るから俗に袴腰と稱へました、三橋を渡つて直ぐ  
に右の方を指して參ります、處ろでございます、折柄プンと云ふ得  
も云はれぬ好味の香いが致しました出羽様は御馬をお止め遊ばして  
クンクン鼻を動かして入らせられたが

雪「是れく金太夫く。」

金「ハハ。」



「今彼の丸に二引の障子の中に香しき香りが致した何を香らせたか尋ねて参れ。」

金「へエ心得ましてございます。」

是れは其頃内田と申まする居酒屋がございまして酒は宜いのを賣りましたが肴は至つて輕輩の食べまする事ゆへ上等のものはございません、其の居酒屋の店へ金太夫罷り越し

金「之れく。」

番「へエく。」

と見ると立派な侍が見世先へ突立てこれくと言つたから何か粗忽

でもあつて叱言られるのかと思ひ番頭が出まして

番「何でございますか。」

金「只今其方の家から香ばしき香りが致した何を香らせたか。」

番「へエ。」

金「イヤサ香ばしき香りが致したが何を香らせたか。」

金「へエ香しきと云ふは何でございます。」

金「香ばしきと云ふのは善い香いと云ふのだ香らしたと云ふのはプンと香つたのを申したのじや。」

番「へ、エ左様で大變に難かしいものでございますな、扱何が香り



ましたか別にお答めに預るやうな香りは致しませんが。」

金「答めるのではない宜い香いだから尋ねに參つた。」

番「へエどうも恐れ入りました。」

金「只恐れ入つたぢやア分らんじやアないか何を匂らしたか。」

番「へイお客様の中で一つ成すつた方でもございますか。」

金「馬鹿をいへ放屁などを尋ねに来るものか、そんな匂いではない善い匂いが致したのだ。」

番「外に香ふものはございせんが魚が沸へ立て居ります。」

金「ウム夫れく夫は何と申す。」

番「是はねぎまと申す。」

金「なんじやと。」

番「ねぎまと申す。」

金「モット明白云へ。」

番「明白言つてもねぎまでござります。」

金「ねぎま……どう云ふ次第の物じや。」

番「旦那様御覽なさいまし葱と鮪と合して煮ますので。」

金「葱の中へ鮪を入れて煮れば葱鮪ではないか、ねぎまでは片言じ

やは以來氣を付ける。」



雪「へエツ恐れ入りました……。」

金「御前へ申し上ります香りしましたのは下方で申すねぎまよと云ふもので下手魚でございませす高貴の方の召飯られるものではございませす餘程下等社會のもので彼様な處ろへ御這入りに成ましてはお宜しくございませせん。」

雪「イヤ〜吾々は隠居を致して心の儘じや寒さは寒し空腹じやが向島で辨當の用意致せと申付た故彼方へ參れば酒肴も充分ぢやが何分寒氣が強いで殆んど難澁じや家來の者にも一杯飯べさして行行雪を見て酒を飲まんければ愉快にならんからさういふ下手の家も又

た一段だ殊に往來も澤山はなし見世に酒を飲んで居る者もなからう。」

金「處ろが只今誰も寒さを避ける爲め多勢立ち寄つて酒を飲んで居ります。」

雪「夫れ見ろ誰でも酒を飲まんければ堪らん岡山侯今の話をお聞きなされたか手前何分空腹で。」

備「宜しい〜御同道致さう。」

と三十五萬石に十八萬石の大名が馬から下りて家來を連れて其處へ

參りますと



番「番頭〜御兩卿入らせられた座敷は何所だ。」

番「手前方には座敷と申して別にございませぬから夫へどうぞ。」

金「馬鹿を言へ醬油樽へ上がお腰が掛られるか汝共が寢起をする所ろがあらう夫へ何か敷物を敷いて奇麗な屏風か何かを立て見苦しき所ろが見へてはならんによつて能く氣を付けろ。」

酒屋の番頭驚ろいて大變な者が飛び込んで來たと思つて急にお雛様の毛氈を敷き屏風といつた所ろが居酒屋の事だから善いのがございませぬ故隣りの家から借りて來るやら騒いで夫からどうぞ是へといふのでズツとお通りになる醬油樽に腰を掛けてはうばつて居るのは

見苦しいから

金「これ〜一同箸を置け。」

と言はれましたから仕方がない客人も持た箸を夫に置き喰ばつたものを吐き出すやら大騒ぎ〜ズツと御兩卿はお通りになつて向うの座敷へお上りになられ

雲「金太夫珍肴佳肴は何があるか相尋ねる。」

金「へイ心得ましてございます、番頭〜。」

番「へイよく呼ぶな……へイお呼びなさいましたか。」

金「エイ珍肴佳肴鮮魚は何ぢや。」



番「何でございます。」

金「珍肴佳肴鮮魚は何ぢや。」

番「珍肴はございませぬへ昨日は鮫鱈がございました。」

金「鮫鱈と珍肴とは違ふ珍らしい肴だ佳肴と云ふは味佳き肴鮮魚とは新らしき魚をさして云ふ。」

番「どうもそう難かしく仰しやつては分りませぬ新らしい魚は何があるかと仰しやるのですか。」

金「左様。」

番「そんならばどうぞ易しく仰しやつて下さい……エ、今日はは

んべんに蛤鍋刺鍋例のねぎま烏賊鍋お魚は蟹に蝦蛄棒鱈。」

金「何だか一向に分らんアもう一遍申して呉れ。」

番「へ、はんべん 蛤 鍋刺鍋ねぎま烏賊鍋お魚は蟹鬼魚に棒鱈。」

金「何だか一向に分らん其分らんものは不可んによつて最前聞いた處のねぎまと云ふものを是へ出せ夫に最上の酒を出だせ。」

番「私共は竹屋でございませぬから笹はございませぬ。」

金「これ酒と云ふのは善き酒をそして云ふのだ汝共は下手だによつて上美たる言葉を知らん故不都合だ美しい酒を出せ。」

番「夫だから先程申上たので難かしい事を仰しやつても分りませぬ



酒なれば酒の美しいのをと仰しやつて下されば分ります。」

と兩人が種々な事を申して居るのを御隠居を二方は何をいつてゐるかと思ふ中にいの字のついた爛徳利にお供が夫に居ります事故厚手の猪口を夫へ七八ッ列べました澤庵の香物が八切酒屋の番頭でございますから、搔背に布の襷を掛け前垂を縛め尻端折りで夫へ持て参りましたから

金「是れ／＼上の御前へ尻を端折つて酒の道具を持参するとは貴様は無禮の奴だ襷を取り尻を下して目八分に持て参れ。」

と一々叱られます金太夫は兩卿の前へお盃を上げますと酒は最上

でもございせんが寒い所へ能く爛がついて居ります又た貴公方は御究屈の所で飲りつけて入らしつやる斯う云ふ所で飲るのも却つて興のあるもので扱寒い上に御空腹の所へ召し飲るからどうも其の味と云ふ者は得も云はれない

雪「イヤどうも是は結構ぢやな愉快々々。」

と云つてる中に番頭が葱鮪の鍋を目八分に持つて

金「オイ／＼火鉢を其處へ置ちやア不可ない目八分に持て居るのだ蹴躓くと不可ない、頭から鍋冠りのにつちやう様と來た日には大變だ。」



「香へ、お待ち遠様。」

とブン／＼云ふ香いどうもグズ／＼煮へてる山椒は鐵砲なしの口火  
かなとは成程旨い事を言いましたものでどうも斯う云ふものには山  
椒が附物でございませす、備前の大守に於ては葱のグズ／＼煮へてる  
のが旨さうでございませすからアングリとやると心に充分露を含んで  
居りましたのが齒で真中を噛みましたから真共に喉へ走り込む  
雪「ア、金太夫是は酷いものであるあんぐり噛んだらばつゆが喉へ  
走り込んだ酷ひ目に遇た。」

金なる程夫は私しも氣が附きませんでしたお火傷をなさいました

か。」

雪「イヤ焼傷も致さんが喉を強く痛めた。」

金「是はぬき鐵ぼうと申して舌の先で綾なして召し上ると左様な事  
はございませせん。」

雪「成程金太夫は萬事心得た男だ。」

とサア夫からやらかしたのやらかさないのつて何うも旨くつて堪ら  
ない頭を叩いて召し上る是方は仲間共へ御酒を下され

○「伊勢夫だから華奢な御隠居様だと云つたんだ御酒を澤山下され  
何程でも勝手に吞め。」



と云ふ御沙汰仲間共は居酒屋に來ちやア馴れて居りますから

△「ヲイねぎまでやたア二つ呉んねへ。」

とドン／＼逃へます殿様は夫れお替り／＼と云ふので鍋十一枚とやらかしました、サアお出掛と云ふので、是より向島へお出でになる彼方此方と乗り廻して充分に御愉快を盡してお一方は大名小路へお歸りお一方は赤坂のお上邸へお戻りになりました、扱て翌朝に相成ましてまだ例刻にお目覺がございません、當日の當番は中村仲右衛門と云ふのでございます、是が心配を致してお枕元の障子を靜かに開け

仲「中村仲右衛門上へ伺がひます。」

雪「ア、仲右衛門何ぢや。」

仲「是早例刻にござりまするがお加減でも悪うござりますれば直ぐ醫者を呼び迎へまする。」

雪「イヤ夫には及ばん昨日酒を少々飲み過したに由て頭がピン／＼致してならんが併し酒を呑めば癒る酒の病は酒でなければ直らんもの心配するには及ばん。」

仲「左様ならば早速御酒の用意を致しますが、お肴は何が宜しうございますかお好みがございますれば仰せ下さるやうに。」



雪「ウム肴か肴はねぎまが宜い。」

仲「何と仰せられます。」

雪「肴はねぎまが宜い。」

仲「へい何と御意遊ばします。」

雪「分らん奴だナねぎまが宜い。」

と仰せられましたが、武家は三度聞いて四度目に聞く事の出来ないもので夫で解らんければ次第によつてはお咎めをも受けなければならんものでございませす、夫故中村は眞青になつてお料理方へ

仲「今日は残雪の景を見んと仰せられてお離れ座敷にて御酒宴の催

しがあるに就てお肴はネツワツと云ふ仰せ。」

料「何ですか分りませんから明白と仰しやつて下さい。」

仲「明白と云つてもネツワツと云ふもんだ。」

料「何だか少とも解りません、何だしら他分是は昨日お雪見のお遠乗の途中で召し上つた物に違いない昨日のお供方の者に聞いたら解るだらう。」

と尋ねますると居酒屋へ飛び込んでねぎまを上つたと云ふ事が分つたけれ共どうも上へねぎまを差上る譯に往ん左様な物を差上ては料理人の落度になりますか仕方がないから岩附葱の極最上の處を一寸



五分に切り最上の鮪をチャンと一つ宛に切りましておつゆを造らへ殿様がお庭の隅の小座敷に残りの雪を御覧になつて居る處へ持て参りました

雪「イヤ來たな昨日のは黒かつたが今日のは大分白い。」

と仰しやつたが今日の鍋は銀か何かだから白い蓋を取て見ると中には葱と鮪がゴロ／＼してつゆがダブ／＼でございます、ハテ昨日のとは違うと思召したが召し上らぬ中はお叱言もなく箸を取て召し上つて見ると、葱がポツ／＼鮪がポツ／＼して居りましたからムツとなすつて鍋を向ふへボンとお投りなされ

雪「ア、宜き料理人を抱へぬのが残念の事である。」

と仰しやいました、其處はお大名様居酒屋の番頭が宜いと思召して居たのい昔しの諸侯様でございます夫が只今では華族様が下方の事情を能く御存じで去ればにや不都合と云ふ事はございませんが寛政時代の諸侯様には往々斯様な事がございました



言葉の助太刀

文化の頃尾張國名古屋喧嘩ケ辻の切合より東海道岩淵に於て親の  
 仇を討ちましたと云ふ孝子小金吾の傳尾州愛知の郡名古屋の城主尾  
 張大納言様の御家來溝口派一刀流御指南番櫻井金吾といふあり（溝  
 口派一刀流と申すは櫻井伍助長政が流祖にして其末に至つて金吾と  
 申しました）爰に又た近頃お召抱へに相成し三枝勘解由と云ふがあ  
 り眞影流の御指南番双方共に劍法は何人と指に折られる程の使ひ手  
 でございます、併し兩雄並び立たずと譬への通り較ともすれば家中

の若侍士が三枝の門弟を誹る又た三枝の門弟は櫻井を誹る師匠同志  
 は流石に大藩の御試南番故左様な事はございませませんが門弟同志の言  
 葉争いより遂には腕力の沙汰に及ぶ事も度々ございしました、時に文  
 化の元年六月廿一日櫻井金吾用事がありまして御城下へ罷り越せし  
 に俄かの夕立實に馬の脊を分けると云ふ譬の通り、少しく其の模様  
 がございしましたから雨具の用意は致しましたけれ共斯く烈しく降る  
 とは思ひませなんだ宛然盆を傾くる許りドウドツと云ふ大雨雷氣も  
 ありますから暫らく雨を凌がんと傍らに辻堂がございしましたから其  
 の辻堂を指して眞一文字に櫻井は駈け込んで参りました或る人の句



に

夕立や法華駆け込む阿彌陀堂

とございしましたが櫻井は何も構はず駆け込む途端に傘の轆轤がホカリ  
中りしましたが向ふ降でございしましたから傘を傾けて來ました故中に  
人が這入つて居たのを知らずに飛び込みました

金「是れは失禮。」

と言いなながら傘をつぼめて見ると是も雨止をして居りましたは三枝  
勘解由互いに門弟同志の争いよりチラ／＼耳に這入つて居る事もあ  
ります故一杯機嫌の三枝が

勘「アイヤ櫻井氏尊公は日頃より三枝勘解由の眞影流の劍法は役に  
立たん等と仰しやるとの事日頃尊公が仰しやるから御門弟が手前の  
流名を誹るのでござる去ばかり御名譽の尊公が向ふに人の立たるの  
がお氣に付かず駆け込んで來て傘を當てると云ふは其意を得ん事  
でござる名人だと云ふお方が人が居るか居ないかを知らずに駆け込  
來たと云ふは俺相千萬。」

といはれて櫻井も

金「イヤ三枝氏尊公は左様仰しやるが手前は此の吹降で傘を傾けて  
參る尊公は立て辻堂の中にて雨を凌いで居なさるのだから向ふから



人が来るか来ないか分りさうな者傘を打付られる迄其處に立て居るとは甚だしい是が傘の轆轤だから宜いやうなもの、眞劍なれば其許の脇腹を突き通すでござらう。」

と一言二言が互いの争いとなり

勤「然らば此の處に於て眞劍の勝負を致さう。」

金言ふにや及ぶ。」

と櫻井三枝互いに辻堂の前に躍り出で刀を抜いて切り合いましたが何を云ふにも双方共に御指南番でも勤める程の人故撓まず去らず切り合いました然る處ろ石轉がしと云つて石の重ねてある上へ櫻井金

吾が過まつて足を掛けるとゴロ／＼と石が轉がつた爲にドウと前へ倒れる處を得たりやヲ、と三枝が肩先より切り下したけれども此方も剛の者倒れながら三枝の横腹をズブリ差す三枝勘解由はヨロ／＼とと踉蹌ながら又一太刀切り下したのは櫻井の肩口より充分に浴びせたから遂に櫻井は其場へ打伏になつて相果てました三枝は脇腹を突かれましたこと故疵口を押へて吾家へ歸り

勤「歸つたぞ／＼。」

倅重太郎が

重「父上様のお歸り是れ健藏御門を開ける。」



「健「畏まりました。」

と家來健藏が立ち出で、括り門を開ける途端にウーンと云つて倒れ  
ました切れ物が最上だから充分に脇腹を突かれましたが夫をソーツ  
と押へて虫の這やうにして家の前まで來ましたがウーンと倒れる途  
端に手が離れたから五臓六腑が吹き出してアツと云つて仕舞ました  
悴重太郎驚ろいて駈け出で、見ると父が脇腹を突かれて倒れて居り  
ますから種々介抱致したが届きません虫の様な息の中に僅かに一  
言二言喧嘩ケ辻の一件をいつたるまゝ息を引取りました夫より直ぐ  
に彼の辻堂の許へ走せ來つて見ると櫻井は肩を充分に切られて倒れ

て居ります其事早くも櫻井の家へも聞へ双方より事の始末をお届けに  
及ぶと尾州の大守聞こし召されて櫻井は其場に於て相果しも三枝は  
切られながらも吾家へ歸つて倒れしは實に士の嗜みは斯くありた  
いと櫻井の家は取潰し三枝は悴重太郎へ家督を仰せ付られ若年なが  
ら劔法は父に劣らざる腕前、行々は劔道指南番を申し付るとの事此  
方は小金吾親子尾州を永のお暇となりて仕方がありませんから東海  
道藤川邊岩淵に懇意の者がございましたから其處に參つて僅かに露  
命を繋いで居りました然るに文化の三年三枝重太郎改名いたして二  
代目三枝勘解由となり劔道指南役を仰せ付られ櫻井とは違ひまして